

雪音クリスは〇〇したい

とりなんこつ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クリスちゃんが可愛すぎて書いてみました。
楽しんでいただければ幸いです。

目次

1. 雪音クリスは御礼がしたい	1
2. 雪音クリスは昼寝がしたい	13
3. 雪音クリスは歓迎したい	20
4. 雪音クリスはお祝いしたい	32
妄想 I F 展開三部作 1. 雪音クリスは G T (ガールズトーク)	
したい	43
妄想 I F 展開三部作 2. 雪音クリスは告白したい	54
妄想 I F 展開三部作 3. 雪音クリスは結婚したい	66

1. 雪音クリスは御礼がしたい

その日、帰り支度をしようとして指令室を出た友里あおいは、ドアの外の雪音クリスを前に足を止めることになる。

特に今日は訓練の予定もないし、こんな時間に発令所まで何か用事があるのかしら――。

そう友里が首を傾げたのもつかの間、上目使いでクリスが話しかけてきた。

「あの……友里、サン」

キュロツトの裾を握りしめながらの恥ずかしげな声音に、彼女が他ならぬ自分への用向きがあることを悟り、驚愕する友里。

雪音クリス。

かつてはフィーネへと組み、二課と敵対したこともある第一種適合者。

一匹狼を自称していた魔弓イチイバルの装者。

今でこそ同僚である装者たちや学友への態度は和らいできているが、大人とは未だ積極的にコミュニケーションを取りたがらないフシがあった。

これは彼女の過酷な生い立ちに由来するものであり、大いに同情の余地があるだろう。

だけに、クリスが自分を頼ってきているらしいことに、友里は驚きを禁じ得ない。

「どうしたの、クリスちゃん？」

内心をおくびにも出さず友里は尋ねた。

「その……」

裾を揉みしだきながら齒切れの悪いクリスに、友里は思う。

装者とはいえ、みな思春期の少女である。やはり同性の方が相談しやすいこともあるに違いない。

そう察し、ゆつくりと先を促した友里であったが、時間をかけて切り出してきたクリスの要望に、今度こそ驚愕の表情を浮かべてしま

う。

「テーブルマナーを教えてください、ですって？」

「しーっ、友里サン、声がでかい！」

「あ、ごめんなさい」

とはいえ、21時過ぎのエントランスである。

現在は通常体制の仮設本部に、目立つ人影はない。

「でも、どうしたのそんないきなり……」

「……………」

友里の質問に、クリスの返事が淀む。

常に即決即断な彼女らしからぬ態度に、友里は職務外の好奇心が鎌首をもたげるのを自覚した。

それでもじつと返事を待っていると、クリスはゆっくりと顔を上げて、

「…そ、その、一度でいいから、フルコースつてもんを食べてみたくてさ」

「ああ、なるほどね。フルコース料理なら、テーブルマナーは必須だものね」

「だけど、教えてくれそうな人は、友里サンくらいしか思い浮かばなくて……」

その台詞に、友里は少々考え込まざるをえない。

同僚である風鳴翼は今はアーティスト活動に精励していた。

財界人らと会食を共にする機会があるため、それらのマナーは心得ているだろうが、不在では教えを乞うわけにはいかない。

数少ない知己の中でクリスが自分に白羽の矢を立てたのは、いわば消去法にのっとつてのことだろう。

一抹の寂しさを感じながらも、大人の女として頼られるのは嬉しく

ないわけではない。

だからこう質問を返したのは、純然たる疑問であって決して意地悪ではなかった。

「それで？ 誰と食べに行くの？」

都内では、一人でフルコースを食べさせる店もあるにはあるが、あえて尋ねる。

「……………それは」

顔を伏せ、再び口ごもるクリス。よくよく見れば耳は真っ赤だ。

友里は過去の青春の匂いを嗅ぐ。

あらら、これはひよつとして。

「もしかして、彼氏でも出来た？」

「か、彼氏!?! ち、違う! あたしはおっさんに礼をしたいだけだッ!」

「…司令に？」

我ながら疑わしげな声が出してしまったと思う。

親しい知人に御礼の食事を——それ自体は、巷によくある話だ。

友里が疑義に満ち満ちた声を発してしまった理由は、特異災害対策機動部二課司令官、風鳴弦十郎の為人に拠る。

『飯食って映画見て寝るッ!』を標榜する彼が普段から何を食しているのかと言えば、専ら大雑把な情報しか入ってこない。

例えば、訓練を終えた装者たちを連れて出向いたのは有名な牛丼チェーン店。

他にもいきなりス〇ーキのディスプレイされていた塊肉を丸々食べたなどといった武勇譚などばかりで、こじやれた店でグラスを傾ける弦十郎など、なかなか想像力が必要な光景である。

「…何か変なことなのか？」

上目使いで見返してくるクリスに、

「ま、まあ、あの人もTPOは心得ているでしょうから…」

しどろもどろになってしまいう友里であるが、腐っても特異災害対策機動部二課司令官だ。お偉方との会食の経験はあるはず。

風鳴司令の動向はともかく、クリスの態度に友里は色々と納得がい

く。

当初、敵対していたクリスマスに説得を試みたのは弦十郎であるし、それを恩義に感じた彼女が改めて御礼をするというのは、何もおかしい話ではない。

つまりは、それだけ精神的な成長、もしくは精神的な余裕が出てきたのだろう。

シンフォギアの装者としてだけではなく、年頃の少女としても、それは喜ぶべきことだ。

「わかった。喜んで協力させてもらうわ」

「…まさか、箸の持ち方から指導しなきゃいけないとはね…」

雪音クリスの自宅で、友里は溜息をつく。

「ちよせえなあ、この箸つてのは」

ぶつぶつ言いながら、弁当の里いもに箸をぶっさすクリス。

「それじゃフォークと扱いが一緒じゃない！」

「でも、フルコースつてのはナイフとフォークが基本なんだろう？」

「そりやそうだけど…」

試しに、夕食がたらコンビニ弁当を摘まませてみればこの体たらくである。

箸の持ち方がなっていないからボロボロ零すし、食べ方も食べ後も、身も蓋もなくいつてしまえば汚い。

一人暮らしをしている彼女だから、誰も指摘も矯正もしてくれないのだろう。

が、それはそれで疑問が浮かぶ。

「クリスマスちゃんは、普段、学校では何を食べているの？」

仲のよい学友が出来たとの情報は二課でも把握している。

一緒に弁当を食べるくらいはするだろうから、そこで何かしらの指

摘はされていないのだろうか。

「んー？ 牛乳とアンパンかな」

「それだけ!？」

「あ、最近は焼きそばパンとコロツケパンもな！ あれはヤバい！」

そこではクリスは胸元の生地を引つ張って、

「でも、あれを喰うと胸がきつくなるんだよなあ…」

「そ、そうなの…」

意識せず友里のコメカミに青筋が浮かぶ。

実のところ、クリスの胸囲は友里の上に行く。加えて張りは比べるべくもない。

湧き上がる黒い衝動を黙殺し、友里は敢えて厳しい声を出す。

「そんな食べ方じゃ、フルコースなんて以前の問題よ？ むしろ一緒に食べるにいった人に恥をかかせちゃうわ」

「…そうなのか」

しゅんと意気消沈するクリスの姿は、一転して保護欲を刺激してくる。

「まあ、そのために私を頼ったんでしょう？ とりあえず、一通りのことは教えてあげるから」

「お、お願いしますッ！」

パツと明るい顔になるクリス。

戦場とは打って変わったコロコロと変わる表情はとても愛らしい。

友里は思う。娘、はさすがに無理があるけれど、妹ならばこんな子が欲しいかも。

「さ、まずは箸の持ち方から練習しましょう」

「え？ だから箸よりフォークとナイフのほうが」

「箸でも刺したり裂いたりできるでしょう？ 箸を上手に扱えれば、フォークとナイフも自然と上手く使えるようになるわ」

「…そういうもんなのか」

不承不承ながら納得するクリスに、友里は内心で舌を出している。

箸が上手になればフォークとナイフも上達するなんてことは知らない。

でも、普段の生活でも困らない程度のこととは仕込んであげるわ。

その日の黄昏時、風鳴弦十郎はスラックスと同色のジャケットを身につけ、街角に佇んでいた。

きちんとネクタイもおろし、普段はネクタイの先端が突っ込まれているポケットには、折りたたまれた直筆の招待状が入っている。

「…しかし、クリスくんから御礼とは、な」

厳つい顔に朴訥とした笑みが浮かぶ。

彼女の過去の境遇を思えば、それは進歩であり、改善であり、同時にすこぶる微笑ましい。

フロントティア事変からしばらく、大した事案こそ発生していなかったが、特異災害対策機動部二課としての仕事は唸るほど存在する。

膨大な事後処理はもちろん、加えて国連直属組織への再編の真つ最中だ。

そんな激務中にも関わらず熱心にこの招待を受けるよう諭してきた友里あおいに、弦十郎も察するところがあつたが、素直に好意に甘えることにした。

風鳴翼のいうところの常在戦場というわけでもないが、司令本人とて24時間365日、職務に拘束される謂れはない。——友里の言葉を要約するところなる。

もつとも、シンフォギア装者との会食を、プライベートと定義するのもどうなのだろうな。

苦笑を頬に刻みつつ周囲を見回せば、小柄な影がこちらに小走りで見ついでるところ。

「お、おっさんお待たせ」

軽く息を切らせた雪音クリスが弦十郎の前に立つ。

「いや、俺もちょうど今来たところだ」

社交辞令を口にしつつ、内心で弦十郎は、ほうと感嘆を漏らす。

今日のクリスは膝が隠れるほどのやや丈の長い深紅のワンピースに、肩には白いシヨールを羽織っている。

化粧もしているのだろう、よくよく見れば唇も微かに朱が指していた。

弦十郎とて木石ではないから、着飾った少女に対し素直に称賛することも吝かではない。

しかし、その言葉が朴訥かつ豪直球なのは、風鳴弦十郎が風鳴弦十郎たる所以だろう。

「今日はずいぶんと綺麗だな、クリスくん」

「う、うえっ!？」

「嘘ではないぞ。随分と見違えた」

「……………ありがとう」

連れだって、目的地となるホテルのレストランを目指して歩き出す。

道々で、見事にドレスコードを体現したクリスに、行き交う人々から遠慮なく視線が注がれた。

小柄な体型の割にはプロポーションが良く、加えて彼女のイメージカラーでもある赤を基調としたファッションは、周囲の注目を集めて余りある。

もともと当の本人は、隣を歩く弦十郎を意識するあまり、自身に注がれる視線に気づくどころではない。

ちなみに弦十郎本人は、その厳つい巨躯にかかわらず気配を押さえ術を心得ている。

客観的には凸凹にもほどがあるだろうと思われるアベックが、特に周囲に違和感を抱かれない理由はそれだった。

着いた先のホテルの最上階のレストラン。

並みの高校生ならとても手の出せない値段であるが、あいにく雪音クリスは普通ではない。

シンフォギア装者には、普通の社会人以上の手当が支給されていた。

他に住居費や学費の免除、福利厚生など手厚いことこの上なかったが、命の対価としてはどうなのだろうか。

現状、ノイズに対抗できるのは聖遺物適合者のみであるため、仕方のない面はあるにせよ、弦十郎は忸怩たる気持ちを抱かずにはいられない。

「どうしたんだ、おっさん？」

対面の椅子に腰を降ろしたクリスが小首をかしげている。

「…なに、普通なら、礼を言わなければならぬのはこちらの方だと思っつてな」

「なんだよ、それ。招待したのはあたしだぜ？」

ぶすつと頬を膨らませるクリスの前に、食前酒と前菜が運ばれてくる。

もつとも未成年である彼女にはノンアルコールの梅酒で、弦十郎はシャンパンだ。

「では、改めて言わせてもらおう。本日はお招きいただき光栄だ」

グラスを掲げて弦十郎。

「…ん。おっさんには色々世話になってるからな」

仏壇も運んでもらえたし、と小声でクリス。

「なるほど、では乾杯しよう」

「何にだよ？」

「装者の輝かしい未来のために」

「気障もすぎるぜ、おっさん」

見事なテーブルマナーを発揮し、クリスは次々とフルコースを平らげた。

その健啖ぶりは、本当にフルコースが食べたかっただけでは、と弦

十郎が錯覚してしまうほど。

デザートも綺麗に食べ終えたクリスの前に、弦十郎は自分のケーキを皿ごと滑らす。

「おっさん…？」

「正直、甘いものは苦手だな」

クリスは弦十郎とケーキを交互に見回す。

明らかな逡巡が浮かぶ顔は、急に幼く見え、弦十郎には辛く映る。

甘えていいのか。意地汚くないか。そしてなにより——これは悪意ではないのか？

差し伸べられた手を目前で翻されるといふ悲惨な体験も経た彼女は、無償の善意というものを信じていなかった。

過去形で語ることが出来るようになったにせよ、一種のトラウマともなったそれは容易に払拭できるものではないらしい。

ゆえに、弦十郎は、あの日と同じく行動で示すしかなかった。

腕を伸ばし、自分のフォークでケーキを一片切り崩し、口へ運ぶ。

「うん、少しブランデーが利いているが、美味しい。が、俺の口には合わないな」

「どっちだよ…」

悪態をつきながら、それでも照れくさそうにクリスは残りのケーキへとフォークを伸ばす。

本当に美味しそうにケーキを頬張るクリスの様子を、弦十郎はブラックコーヒーを片手に眺めた。

「…で、その挙句がこれか」

レストランからの帰り道。

弦十郎の隣にクリスの姿はない。

代わりに、弦十郎の広い背中ですいよすいよと寝息を立てている。確かにブランドーの利いたキーキだった。にしても、クリスがここまで酒に弱いとは完全な想定外だ。

酔っぱらった未成年の彼女を、一人タクシーで帰らせるわけにもいかない。

それに、適合者はこの世界においてダイヤモンドよりも貴重な存在である。

そしてなにより自分は彼女たちを守る組織の総司令である——。
雑多な事情を豪快にひとまとめに叩き割り、風鳴弦十郎は、自ら雪音クリスを自宅へと送り届けている最中であつた。

斡旋したこともあり自宅の場所は把握している。距離的にもそれほど大した距離ではない。

だが、だいぶ夜も更けていた。

傍から見れば、厳つい大男が明らかに未成年な少女を背負って歩いている姿は怪しい以外の何ものでもない。

が、弦十郎の懸念に反し、すれ違った警官から職質を受けることはなかった。

過日の仏壇の件を思い出し、戦々恐々としていた弦十郎にとって拍子抜けである。

もしかしたら親子だとも思われたのだろうか。

その答えは、クリスの自宅へ到着し、彼女をベッドへ横たえたところで判明したかと思われた。

「…。パパ」

軽く上気した頬に、驚くほど無垢な笑顔が浮かんでいる。

きつと父親の昔の夢でも見ているのだろう。

そう解釈し、微笑みを浮かべてベッドから離れようとした弦十郎だったが、果たせなかった。

眠ったままのクリスが、ジャケットの裾をがっちりと掴んでいたのである。

無理やり引き剥がしてしまえば、幸福な眠りを破ってしまうのでは

ないか。

躊躇する弦十郎の前で、眠ったままのクリスマスが再び呟いた。

「…おっさん」

同時に、赤く滑らかな頬を、一筋の涙が伝う。

にも関わらず、彼女の顔には年相応の笑みが浮かんでいるのどうい
うことだろうか？

弦十郎はしばし立ち尽くす。

眠る少女の横顔にやさしく視線を注ぎ——そして彼は紳士だっ
た。

器用にジャケットを脱ぐと、そつと雪音クリスマスの部屋を辞した。

彼女の幸福な眠りを破ってしまわないように。

そして部屋を出た頃には、胸ポケットにネクタイの先端が入れられ
ている。

後日、テーブルマナーの御礼も兼ねて、司令との会食の件を友里に
報告するクリスマス。

たまさかその現場を弦十郎が通りかかったのは、天の采配か、それ
とも悪魔の気まぐれか。

「そこで、目え覚ましたら、部屋にはおっさんの脱いだ服だけが転がっ
てて…」

「……………」

「…まで、友里！ そんな目で見るのは俺の話聞いてからにしてくれッ！」

2. 雪音クリスは昼寝がしたい

私立リディアン音楽院も午前中で授業が終了する日が存在する。

その日、雪音クリスは、お昼を食べて遊びに行こうという学友の誘いを固辞し、一人自宅へと向かっていた。

道々のコンビニであんぱんと牛乳を購入。歩きながら空腹を満たす。

風鳴翼あたりから『行儀が悪いッ！』と眉を顰められそうな光景ではあるが、クリスの内情は切実だ。

彼女の心の声を代弁すれば、ズバリ、

「…眠い、眠さが爆発しているッ！」

原因は、昨晚寝る前に鑑賞したレンタルDVD。

序盤こそ壮大なミステリー展開にわくわくしながら見ていたが、中盤から後半へかけては怒涛のホラーラッシュ。

ならば見なければよさそうなものだが、結末が気になって結局ガツツリ見てしまった。

代償として、寝室どころかマンション中の電気をつけ、朝までまんじりとせず過ごすことに。

仏壇の前で差し込む朝日にようやく眠気を催し、うとうとしたと思った瞬間に目覚ましのベルが鳴る。

結果として、彼女はほとんど眠らず午前中の授業をこなしていた。

「まあ、今日は特に訓練とかもないしな…」

あくび紛れでひとりごち、自宅のドアの鍵を開けるクリス。

気合と根性で授業を乗り切ったツケは、いま猛烈な眠気となって彼女へと襲いかかっていた。

靴を脱ぎ散らかし、廊下を歩きながらニーソックスも脱いで行く。

そのまま寝室へ直行し、ベッドへとダイブ。

速やかに夢の国へ下降していく寸前、制服を着たままのことを思い出す。

このまま寝ては皺になつてしまう。そして明日も学校はある。

最後の気力を振り絞り制服を脱いでベッドの外へ放り出す。

下着だけの恰好になつたクリスは、思いきり枕へと頭を押し付け
た。

さあ、夢の国へ、M E G A D E T H P A R T Y…。

その時だった。

「ク・リ・スちゃんくん！」

開け放しの寝室のドアから、能天気極まる大きな声。

「な、な、な…!?!」

ベッドで跳ね起き狼狽するクリスに、

「わ、クリスちゃんってば、だいたーん」

と制服姿の立花響がいる。

そこできょうやく自分が下着姿であることを思い出したクリスは、
ベッドの上の毛布を掻き集め胸元を隠す。

返す刀で響へと口撃。

「おまえ、なんでここにいるツ!?!」

「んー、あたしだけじゃないよー?」

ケロッとした顔で小首を傾げる響の背後から、小日向未来が顔を出した。彼女の手にはクリスが脱ぎ捨てたニーソックスが畳まれている。

「響、ダメじゃない。いきなり寝室へ入ったりしたら失礼だよ?」

最愛の陽だまりの指摘にバツの悪そうな顔をしながらも響はブー
たれる。

「でも、何度チャイムを押しても出なかつたし。もしかしたらクリス
ちゃんが意識不明で倒れているかもーって心配になつてつい…」

「単に留守とか寝ているって発想が出てこないのかおまえツ!?! つー
か、寝室以前に勝手に人の家に入ってきてるんじゃないじゃねえツ!?!」

「そんな固いこといわないでよ、クリスちゃん。せつかく遊びに来た

んだからさ」

駄目だこの馬鹿、話が通じねえ。

ならばと非難の矛先を未来へ変えれば、

「ごめんね、響がどうしてもクリスと一緒にお昼食べたいっていうからお邪魔したんだけど…」

クリスは別の意味で諦めを悟らざるを得ない。

一見常識人枠と思われる未来であるが、響絡みになると言動がエンジヨイ&エキサイティングへと振り切れる傾向にある。

いそいそと部屋着を着こみながら、クリスは別の切り口で牙を剥く。

「いいか、あたしはもう昼飯は喰った！　そして全力全開で眠いッ！

だから今から昼寝するッ！」

直情馬鹿には直截的な言葉は一番伝わる。

経験則から導きだされた偽りのない本音の一撃。

が、ド天然太陽娘は余裕でスルー。

「なんだ、クリスちゃん、お昼寝したかったの？　それじゃあ、ほら」

小日向未来を正座させ、その膝を響はポンポンと叩いて、

「特別に、未来の膝枕を貸してあげる。とっても柔らかくて、寝ていて気持ちいいんだよー♪」

「やだ、響ったら」

きやいきやいと騒ぐ太陽ダマリーズに、クリスのコメカミは熱く脈打つ。

「…あのなあ〜!!」

「あれ？　クリスちゃん気に入らない？　よし、それじゃとっておきだよー！」

言うが早いが響は未来をお姫様だっこする。

ここいらへんの普通の女子高生離れした筋力は日々の訓練の賜物だろう。

続けて未来をベッドの上へ放り投げてきたのには、さすがのクリスも面食らう。

弾む未来。驚くクリス。二人を前に響自身も堂々とベッドに横に

なる。

二人並んで横たわると、未来越しにポンポンとマットレスを叩いて、

「ほら、クリスちゃんも」

「…何の真似だ？」

「添い寝だよ。未来に抱きついて寝ると、温かくて、いい匂いがして、とつてもよく眠れるんだよ。だから、クリスちゃんも、ほら」

手招きしてくる響に、赤面してそっぽを向きながらクリスは言い放つ。

「…そーゆーのは家でやれ！」

「え？ ここはクリスちゃんの家でしょ？」

「お・ま・え・らの家でだ〜ッ!!」

二人をどうにかこうにか追い出し、クリスはリビングで溜息をつく。

テーブルの上には持参してきたらしい弁当があつたが感謝する気にもなれない。

寝入りばなを邪魔された機嫌の悪さと、怒りのアドレナリン分泌のおかげですつかり目が冴えてしまったと思つたが、常備している牛乳を飲むとようやく気持ちも落ちついてきた。

同時に、遠ざかっていた睡魔も戻ってくる。

ふああと大きな欠伸をしつつ、クリスは玄関のドアへと施錠。

響たちは合鍵を使用して勝手に侵入してきたらしい。

あいつらめ、そのうち鍵を変えてやろうか。さすがに今日はもう

戻ってこないだろうけど、念のためチェーンもかけておこう…。

そう思い、クリスがチェーンをかけようとした瞬間、ぐるつと施錠したはずの鍵が逆回転。

「邪魔するぞ、雪音」

「風鳴、センパイ…？」

クリスは失念していた。もう一人、自宅の合鍵を持つ人物を。

突然すぎる来訪というか展開に固まるクリスをよそに、ずかずかと室内へ上がり込んでくる風鳴翼。

「ほう、ここが雪音の住まいか。眺めはいいし、うむ、実に見事な仏壇だな」

「あの、センパイ…」

「新しいバイクの鳴らし運転をされていて、ちょうど近くを通りかかったものだからな」

土産だ、と包みを手渡してくる翼。

不承不承開けてみれば、中身は落雁だった。

ここいらの彼女の趣味の渋さは、クリスには理解しかねる。

「合鍵をもらっていたから、いつか来ようと思っていたが、なかなか機会がなくてな…。遅くなってすまない」

ライダースーツのままソファーに座り、笑顔でそう述懐する翼。

合鍵はあんたらが勝手に作っただけだし、元々こつちは誘つてもいねえよ…。

本音を口の中でもごもごと呟いて、クリスは買い置きのパットポトルからお茶を注ぐ。

眠気と苛立ちで頭の中はぐちゃぐちゃだ。

だが、相手は仮にもセンパイと認めた前任装者。邪険に追い払うにわけにはいかない。

たん、とお茶の入ったコップと落雁を数枚テーブルに並べる。

「で？ 何の用事なんだよ？」

「なんだ、ずいぶんとつれない態度だな」

「そりゃあどうも」

答えつつ盛大に欠伸をして見せれば、翼は形の良い眉根を寄せる。

「どうやら、すごぶる眠そうな様子だが」

「そうだよ。こちらら寝不足で、ちょうど今から昼寝をしようとしていたところで…」

半ば投げやりに答えたクリスであったが、翼の雰囲気が一瞬で切り替わる。

「昼寝、だと…？」

「…なんだよ、悪いのか？」

翼は立ち上がる。

背筋を伸ばし、凜と脚立する姿は、地に突き立てた絶刀と見間違えが如し。

「防人足らんとするもの、早寝早起き自己管理が肝要！ 真昼間から眠気を催すなど、たるんでいるッ！」

その剣幕に、うんざりとクリスは天を仰ぐ。

あー、この人も結構面倒くさい人だったな…。

それでも普段のクリスなら適当にいなしたことだろう。

だが、今の彼女は眠気と不機嫌も相まって、かなり適当かつ攻撃的になっていた。

「そりゃあ決めつけが過ぎるんじゃないかい、センパイ」

「ほう？ どんない訳があるというんだ？」

「あたしだって別に遊んで夜更かししてたわけじゃないぜ。夜間戦闘を想定しての自己鍛錬をしていたんだよ」

カ・デインギルの一撃ばりの大嘘である。

アーティストと装者、加えて学生生活を送る自己管理の鬼・風鳴翼に対し、言いも言ったりの台詞だが、ほとんどやけっぱちで断言するクリスに後ろめたさは感じられない。

「む…」

たじろぐ翼に、さらにクリスは畳みかける。

「だいたいここが戦場だってなら、休めるときに休む、眠れるときに寝ておくのも防人としての嗜みじゃないのか？」

「むう…。悔しいが雪音の言うとおりがもしれん」

…基本的にちよろいんじゃないかねーの、この人？

目の下に隈を浮かべ不遜な感想を抱くクリスをよそに、翼は予想外の感銘を受けた様子。

「確かに不躰な言い様だった。謝罪する。かくなる上は、おまえの昼寝のために、私もささやかながら微力を尽くさせてもらおう」

「おう」

横柄に返事をしておいて、やれやれこれでやっと眠れる、と安堵の息を吐くクリス。

しかし、翼が次にとった行動は、彼女の予想の遥か斜め上に行く。

翼は立ち上がり、やおらクリスの手を取る。

「セ、センパイ?」

てつきり帰るとばかり思っていたので面食らうクリスを引つ張り、翼はずんずんと部屋の奥へと誘っていく。

「む、ここが寝室かッ!」

おもむろにベッドの上の毛布を剥ぎ取る翼。

続いて合気の要領でコテンとクリスをベッドに横にすると、その上に丁寧に毛布を掛ける。

きよとんとしてされるがままのクリスだったが、翼がベッド脇に端座するに至り、ようやく疑問を口から絞り出すことに成功。

「あんた、一体何を…?」

「非常時にて、寝込みを襲われるのが武人最大の懸念。雪音の心配もそこに尽きるのであろう?」

「いや、そんな懸念や心配なんてこれっぽっちも…」

「ゆえにこの風鳴翼! おまえの安眠を守るため、あい不寝番を務めよう! さあ、雪音! 存分に眠るが良いッ!」

「眠れるか…! ツツツ!!」

3. 雪音クリスは歓迎したい

特異災害対策機動部二課が国連直轄下の機動部隊「S・O・N・G.」として再編されて幾日。

国内外で実績を積みつつあったS・O・N・G.だったが、この時期に先のフロンティア事変の中核たる元F・I・Sにして武装組織ファイネの面々も拘禁を解かれることになった。

マリア・カデンツアヴナ・イヴは司法取引に応じ、実は国連所属のエージェントとしてアンダーカバーとしてF・I・Sへと潜入、内からドクター・ウエルらのたくらみを打ち砕いたとのカヴァーストーリーを背景に、元の歌手活動を再開することになる。

月読調、暁切歌の両名は、表舞台に立たなかつたこともあり、国連指導の特別保護観察下のもとで二課が身柄を引き受け、私立リディアン音楽院へと編入。

三名とも組織の監視下にあるとはいえ、人並みの自由を手に入れた格好となる。

元々マリアが歌姫として活躍していたのは海外である。同じく海外進出を進める風鳴翼に伴って出国する直前、彼女は雪音クリスに面会を求めていた。

「私が留守中、調と切歌のことを君に託したい」

さんざん愛されキャラがどうか指摘してクリスの顔色を変化させたあと、マリアが真剣な面持ちでいった。

礼儀には礼儀で応じることを弁えているクリスである。

それでも、二課に参入当初のクリスであれば「そんなのあたしの柄じゃねえ」と一蹴していたことだろう。

が、彼女も幾多の戦いを経て成長していた。

この場合の成長は、精神、肉体だけでなく、仲間との紐帯も意味する。

クリス自身、最終決戦では共闘してネフィリムを屠ったマリア、調、

切歌に対する蟠りはない。

これはマリアも同様だろう。

それらを踏まえ、クリスを頼ったマリアの判断は、一度は二課に敵対したものの同士の共感に基づくものだけではなかった。

現在 S・O・N・G・に在籍する聖遺物適合者はもう一人存在する。

立花響。

第三種適合者と称される彼女が、そもそもの装者へと至った道筋をどうこう批評するつもりはない。

むしろ最終決戦における、破天荒とも呼べるような収束力、突破力は、仲間としてはこの上なく頼もしく思える。

ではそんな彼女が、果たして後進の育成に相応しいだろうか。

答えは——否。

装者として、彼女のスタイルは参考にはならない。あれはあくまで立花響という固有かつ極限のスタイルだ。

彼女の影響を被るべきではない。調も切歌も独自のスタイルを模索、もしくは貫いて欲しい。

それゆえに、マリアはクリスを選択した。選択せざるを得なかったともいえる。

一方、クリスの見解はマリアのものとは若干異なる。

あの馬鹿に後輩の面倒を見させる？

冗談じゃねーよ。ただでさえあいつの感化力は半端ねえのに。

仮にあいつに二人を預けたとしよう。直情脳筋突撃バカが量産されるならまだいい。

だがまかり間違つて小日向教に帰依させちまったら、誰がどう責任をとりやいいんだ…。

このように微妙に違う切り口から二人は同じ結論に至った。

だからといって、互いに熱い握手を交わしたわけではない。

クリスは伸ばしかけた手を照れたようにひっこめると後頭部に回し、明後日の方を向きながらぶつきらぼうに言う。

「…仕方ねえな。まかせとけ」

翼とマリアが日本を発った翌日。

彼女経由でメールアドレスを知ったクリスマスから、月読調、暁切歌両名に同文のメールが届く。

その内容は、

“夕飯を食べず、着換えて、指定した時刻まで駅前に集合！”

指定した日の夕刻。

待ち合わせに指定した駅前のモニUMENTの前で、クリスマスは一人気を揉んでいた。

「あいつら遅せえな。ひよつとして迷ってるんじゃないのか？」

時刻は約束の時間の五分ほど前。

実はクリスマス自身は三十分ほど前には到着しており、同じことを繰り返してはいたりする。

そして約束の時間を少しまわったころ、二人の少女の姿が視界に飛び込んできた。

「おーい、こっちだ、こっちー！」

喜色を浮かべ手を振るクリスマスに対し、歩いてくる調と切歌の表情はお世辞にも明るいとは言えなかった。

着ている服もお洒落着というより運動しやすいような機能的な服装。

「…クリスマス先輩、こんばんはデース…」

「こんばんは…」

明らかにテンションが低い二人に、さすがのクリスも眉根を寄せ
る。

「おいおい、どうしたんだ二人とも？」

調と切歌は顔を見合わせる。

そして切歌は思いつめたような顔で、

「クリス先輩、お願いデス。どうか地獄のシゴキはアタシだけで、調は
カンベンしてくださいデース…」

「そんな！ 切ちゃんだけにさせられないよ！ ううん、センパイ！

鬼も逃げ出す猛特訓を受けるのは私だけで…!!」

いやいやここはアタシデス！

ううん、ここは私が！

やいのやいの揉めはじめる二人を、クリスは珍妙なものでも見るよ
うな顔つきで眺める。

「…おい、何がどうなってる？」

「え…？ 先輩はそのつもりでメールくれたんデスよね？」

指摘され、クリスは慌てて自分の携帯端末を展開。

自身が送信したメールの内容を確かめると、なるほど、そのように
受け取れなくもない…のか？

いや、だとしても少しばかり牽強付会が過ぎやしないか、おい。

「響さん相談したら、『絶対にご飯食べて行くと吐いちゃうような秘密
特訓だよ!!』…って」

「——ああ、なるほど」

色々すとんと腑に落ちる。

こちらにも落ち度はあるが、あの馬鹿め、余計にややこしくして
くれるな。

「ごほん。…ちーつとばかり誤解があったみたいだが、今日おまえら
を呼んだのは晩飯でもご馳走してやろうと思ってのことだ！」

「本当デスか!？」

少しだけ切歌の顔が明るくなる。

「じー」

そして未だ疑わしげな視線を向けてくるのは調。

二者二様の反応に、クリスは内心で苦笑まじりに呟く。
：さっそく面倒臭くなってきたぜ。

だが、マリアに宣言した手前、ここで尻を捲るわけにはいかない。仲間との約束は、もう違えることはないと言った。二度も三度も裏切るのはごめん。

「とりあえずこっちだ。行くぞ」

クリスは後輩たちを先導して歩き出す。

実のところ、マリアから事後を託された時点で、後輩たちにどう接するべきかクリスは風鳴弦十郎へと相談していた。

この時点で人選的に間違っている気がしないでもないが、弦十郎の訓示はただ一言。

『同じ釜の飯を喰えッ！』

前世紀のスポコン漫画に登場しそうな台詞だが、そこはそれクリスも幾多の特訓を経てだいぶ感化されていた。

そんな彼女がエクストリームに解釈した結果が、親睦会という名の食事会である。

F・I・Sに「フィーネ」として反旗を翻す以前の潜伏期より、マリアも含めた彼女たちはかなりカツカツの生活を送っていたらしい。インスタントカップメンが嗜好品で、298円クラスになれば至上のご馳走。

二課に拘留された後の拘置所の食事に、涙を流して喜んでいたとの話もありサーチ済みだ。

ならいっちょ美味しいものをしこたま食べさせてやろうじゃねーか。まず頭に浮かんだのは、高級フレンチのフルコース。

過日、友里あおいにテーブルマナーを学んだ実績がクリスにはあった。

しかし、調と切歌がそれらの作法を会得していなければご破算で、かといってそのためにテーブルマナーを教えるのも迂遠な話である。

となれば、寿司？ 焼肉？ イタリアン？ 中華？

散々悩み、ネットの情報も検索しまくった挙句、クリスが選んだ店は――。

「おつと、ここだ、ここ」

とあるビルの前で足を止めるクリス。

未だ緊張が抜けない後輩たちとともにエレベーターで五階まで上がる。

「なんデスカ、この店…?」

「これは…英語とは違う。…ポルトガル語?」

派手な発色の看板に慄く二人を後目に、クリスは前払いで会計を済ませた。

「おらおら、ぼーつと立ってちや通行の邪魔だぜ? 入った入った」

二人の背中を押す。

通路の角を曲がり、視界が開けると、背中を押していた重い感触が嘘のように消えた。

「わあ…!!」

感嘆の声は、二人のどちらが漏らしたものか。いや、きっと完璧にユニゾンした二つの声だろう。

広いフロアに整然と並ぶテーブル席。

そしてその中央に横たわる長々としたテーブルには、ところ狭しと料理が並べられている。

幾種もの野菜がボウルにてんこ盛りのサラダエリア。

三種類のスープコーナーに併設するように、ビーフシチューやカレーもくつくつと煮えている。

パスタも何種類かトレイの上に温められており、他にはパンやピラフなどのご飯もの。

から揚げやフライドポテト、オニオンフライといった揚げ物もそれぞれ堆く盛られていた。

それらが霞むような見たこともない大皿料理の数々も目を引いたが、調、切歌兩名が何より視線をひきつけられたのはデザートコーナー。

色とりどりの光を放つケーキ。数種類にも及ぶアイスクリームにソフトクリーム。

そんな華々しいスイーツたちの中で、なお燦然と屹立するものがあ

る。

「…調、あれはもしかして…」

「そう、切ちゃん。間違いない、あれが伝説の チヨコフアウンデン 聖遺物…!!」

そのまま駆け出そうとする二人の襟首をクリスはガツチリと抑える。

「なんデスカ、先輩！ ここにきてお預けデスカ！ 意地悪デスカ！」

「Various shul shagana…」

「リンカーもなしにこんな場所で聖詠してんじゃねえッ！」

不本意ながら調の頭をポカリと小突き、まずは店員さんの説明を聞けと椅子へ二人の肩を押し付ける。

が、どう見ても二人とも気はそぞろで、店員の台詞はまるで耳に入っていない様子。

開店したばかりで誰からも手を付けられてないご馳走の山。

それを前にして、お預けを喰らった犬ばりに興奮するなどというのが無理な相談だ。

調と切歌は何を喰わせてやれば一番喜ぶだろう？

クリスが頭を捻りに捻って導き出した結論は、好きなものが好きなだけ食べられるバイキング——だけではない。

もはや限界とばかりに椅子から腰を浮かしかけた二人の前に、それは現れた。

「お待たせしました」

エプロン姿の店員が、クリスたちのテーブルの前にやってくる。

「…ほわあああ!？」

両名が声をあげたのもむべなるかな。

店員の手には、巨大な鉄串にさされた肉の塊が抱えられていた。

「豚のコステラ、リブ、肋骨の部分の肉でございます」

説明しながら三人の皿に、それぞれ肉片を切り分けていく店員。

「先輩、これは…?」

上目使いで見えてくる調に、クリスは言う。

「デザートも悪くはないが、ここのメインは肉さ。まあ、とりあえず食ってみな」

ゴクリ、と二人の喉がなる。

「い、いただきますデース！」

我に返ったように切歌は肉を切り刻み、頬張った。半瞬遅れて調もならう。

「くくく!! 肉汁が溢れてくるデース！」

「切ちゃん、お肉ってこんなに柔らかかったんだね…！」

夢中で肉を平らげる二人だったが、

「牛肉のアウカツトラ、ランプ肉です」

「鶏肉のフランゴ、手羽先です」

「豚のソーセージです」

店員の来襲は止まらない。

もつとも二人の食欲も止まらない。

一応、切り分ける前に店員はいるかいらないか、どれくらい量がいるか尋ねてくるのだが、切歌も調もいちいち律儀に頼むため、皿の空いている暇がない。

「おいおい、そんなに無理して全部喰わなくてもいいんだぞ？」

苦言を呈しながらも、その肉はこの玉ねぎのソースをつけると美味しいぞ、などとクリスもいちいち甲斐甲斐しい。

次々と肉を頬張り、飲み下し、唇の端にソースをつけたまま切歌は顔を上げ、うっとりとした声を出す。

「…ここはぱらいそデスか？」

「私たちの目指していた世界がここに…」

調に至っては、涙目で感無量で呟いている。

「おまえら、いちいち言うことが大げさなんだよ」

鷹揚に構えながらもクリスの表情はにやけまわっている。

当初は寿司なども考えていたが、あまり高級な店だと気楽にとはいかない。だからといって回転寿司では少しばかり侘しすぎる。

じゃあ焼肉か？ とも思ったが、あれはあれで焼いていると結構忙しい。焼けば煙の匂いもつくし、注文するときに値段を気にされて遠慮されるのも避けたい。

ステーキも良いけれど、注文したものが出てきたあとは、なかなか

間が持たないものだ。

そこでクリスが至った結論は、最近巷で流行っているとも言われるシユラスコ。

席にただで焼き立ての肉の塊が次々と運ばれてくるというインパクトのあるシステムも去ることながら、他のサラダや料理のバイキング形式もパッケージされているコースが大半を占める。

これなら二人も驚く+満足してくれるだろう。

今のクリスは、目論見が凶に当たったこと、先輩の面目が施せたこと、二人が喜んでくれているらしいことの満足感に八割ほど満たされていた。

残る二割は——彼女自身、ブラジル料理とシユラスコに興味こそられていたことは否定しない。

「し、調！ このアバカシ（焼きパイナップル）ってのはとんでもなく美味しいデスよ!?!」

「焼いたパイナップルがこんなに甘くて美味しいなんて、信じられない…!!」

気づけば、店内もだいたい混んできていた。

男性客も多いが女性グループの姿もあり、クリスたちが悪目立ちするすることもない。

もごもごと自分の肉を頬張るクリスをあとに、後輩二人はバイキングゾーンにも突撃。

「おーい、ちゃんと野菜も食べるよ?」

一応そう声をかけたが、本意ではない。

バイキングなんだから、好きなものを好きなだけ喰えばいいさ。

「ピカンヤ、イチボ肉でございます」

「あ、ください」

一通り肉を食べ比べ終え、クリスはテーブルの上の札を引つ繰り返

す。

この札の表裏で、店員は肉を持っていくテーブルか否かを判断するというシステムだ。

「調、そろそろデザートコーナーに第四次出撃デスよ」

「まっつて切ちゃん、このケーキ、もう食べ終わるから…」

「おまえら、まだ行けるのか?」

後輩二人の健啖ぶりにクリスは呆れてみせるが、彼女自身、デザート分の別腹は確保している。

「どれ、じゃあ、あたしも甘いもんでも食うか」

そしてしばらくあとのテーブルの上。

クリスはケーキを一通り確保。

切歌は各種アイスクリームを大皿にてんこ盛り。

調は串に刺したマシユマロにチョコをかけたものを、お団子よろしく頬張っている。

「んー♪ どれを食べても甘くて冷たくて美味しいデース!」

「チョコファウンデンを開発した人は本当に天才…」

もりもりアイスクリームを平らげた切歌は、そこで上目使いでクリスを見て、

「…焼きパイナップル、もう一回注文しても大丈夫デスか?」

「ああ、喰え喰え」

調は心配そうに顔を上げて、

「あ、でも、もう時間が…」

「三時間コースだ。まだ時間はたっぷりあるぞ」

「ぱああ、と今度こそ屈託のない笑顔を浮かべる後輩二人。

「じゃ、じゃあ、お土産に少し持って帰ってもいいデスよね!」

「それはダメに決まってるんだろ! …そのうちまた連れてきてやるから」

裏表のないキラキラとした二組の瞳に見つめられ、クリスは何やら背筋がこそばゆくて仕方ない。

「ど、どれ、あたしもお代わりしてくるか」

眼差しから逃げるように腰を浮かしかけたその時だった。

派手なラテン系の音楽が店内に鳴り響く。

続けて、サンバ衣装に身を包み、褐色の肌を晒したお姉さん方が突入してくる。

「な、なんデスか!？」

「あー……」

そういえば、この店を検索したとき、ホームページに週に何回かの割合でサンバタイムがあると書いてあったことをクリスは思い出す。

陽気なお姉さんたちは身体をくねらせながら次々と客の手をとって立たせている。

立った客からサンバの輪に加わり、中央のテーブルの周辺を踊りながら回り出す。

あまりのノリの良さに、拒否する客は見当たらない。

同調圧力というわけでもないだろうが、クリスたちもその輪に誘われることになる。

アップビートの陽気な曲に、やや躊躇いながらも見よう見まねで身体をくねらす三人。

たらふく食べたばかりなのに無茶というなかれ。

基本的に装者はタフだ。いや、タフでなければシンフォギアは纏えないといったほうが正解か。

加えて歌を唄いながら戦う彼女たちにリズム感がないわけではない。

たちまちリズムに乗った三人は、本職のお姉さんに称賛されるほど見事にサンバを踊りきった。

「いやー、楽しいデスね、先輩！」

「ああ、サンバも悪くないな」

「踊ったらまたお腹空いたデス♪」

「……マジかよ?」

切歌に本気で突っ込みを入れるクリスだったが、

「……………じー」

三白眼でじっとこちらを見ている調の様子には気づかなかった。

明けて翌日の学校。

登校したクリスは、後輩コンビの姿を探す。

ある意味、立花小日向組に匹敵するほど目立つ二人の姿は見受けられない。

どうしたんだ、アイツら？ まさか食べ過ぎで腹でも壊したんじや…。

予鈴の鳴る寸前まで心配したクリスは、携帯電話で連絡を取ることにする。

『…あ、先輩。おはようデス』

「おい、どうした？ どっか具合でも悪くしたのか!？」

『いえ、アタシはそういうわけでもないんデスが、調が…』

「アイツがどうした？」

『はい、夕べ帰ってきてから部屋に閉じこもってて…』

「…うん？」

『何度呼びにいつても、部屋の中から「切ちゃんはプルンプルン」「…たゆんたゆん、ううん、ばるんばるんしていた」「引き換え私は…はっ」って乾いた笑い声が繰り返し聞こえるだけで…』

「なんだそりゃ？」

4. 雪音クリスマスはお祝いしたい

時は12月、師走。

師、すなわち先生が走りまわるほど忙しいから師走というらしい。実際、半分は日本人の血が流れている雪音クリスマスからして、その忙しさは十分に体感していた。

学生的には、なにより頭が痛くなる期末考査があつた。

けれど、その後の冬休みを控え、教室全体にウキウキとした気分が漂っていた。

世間的にも12月に入ればクリスマスイルミネーション一色で、街全体が浮足立っているような気がする。

そんな雰囲気も嫌いじゃないが、煌びやかな洋装の格好で行き交う人々も、クリスマスから一週間後には着物を着て神社へお参りするのだ。

キリスト教のお祝いから神道の礼拝へ、誰も疑問を抱かずスムーズに移行してしまう。

本当に、日本は無国籍というか多国籍というか。

街中を歩きながら、クリスマスが日本特有の慣例に皮肉げな眼差しを向けてしまうのは事情がある。

種を明かせば、それは彼女の誕生日。

12月28日生まれのクリスマスとしては、どうしてもクリスマスと比べてしまう。

それなりに敬虔なカトリック信者であつた母、ソネット。

海外ボランティア先でも積極的にクリスマスコンサートなどを行っていた。

その盛大さに反し、クリスマスの誕生会は、両親のみと行われるささやかななもの。

それはそれで幸せな想い出だったが、クリスマスパーティーに比べるとトーンダウンしていることは否めない。

——自分の誕生日も、クリスマス並みに盛大に祝ってもらいたい

と思ったのは、ワガママだったのだろうか？

過去を眺めて硬くなっていたクリスの視線が不意に緩む。

今となってはそれが無用の心配であることに気づいたからだ。

むしろ放っておいて欲しいと思ったって、放っておいてくれない連中がいる。

「あ、クリスちゃん！」

ほら、な。

「どうしたの、そんなぼんやりして。もしかしてお腹空いたの？」

「おまえと一緒にすんな、バカ！」

盛大にドヤしつけた相手は立花響。

一個下のクセに、どうもこっちの方を年下に思っているフシがある。

正直、暑苦しい上にクソ馴れ馴れしい言動は苦手だけど、コイツ自体は信頼のおける仲間だ。絶対に面向かっては言っちゃらないけど。

そんなことを思いつつ、クリスは響と肩を並べて歩き出す。

「いや、明日の本部主催のクリスマス会、楽しみだね！ プレゼント交換用の、もう買った？」

「…おう」

生返事をしつつ、プレゼントは先日の休日を丸々費やして吟味したクリスマスである。

「パーティ会場はバイキングでき、ケーキはなんと10種類もあるんだって！ う、今からたまらないよ！」

「結局食い気かよ、おまえは…」

呆れて見せるクリスマスだったが、次に響が口にした台詞は聞き捨てならない。

「今回は師匠から賞品もでるみたいだし！ なにかな？ 食べものだといいなあ」

「……？ おい、それは何の話だ？」

「あ、しまったッ！ これはクリスちゃんに言っちゃいけないコトだった！」

露骨に口元を押さえる響。次いで、

「それじゃ、クリスマスパーティーでね〜」

「あ、コラー！ 待て！」

クリスの制止を振り切り、全力ダッシュで響は行ってしまった。

「……なんなんだ、おい」

ボヤククリスの前に、バイクの排気音が轟く。

思わず道路側に視線を向けると、停めたバイクから颯爽と降りるライダーの姿が。

ライダーがヘルメットを脱げば、見慣れたサイドテールの長い髪が零れる。

「…先輩!？」

「奇遇だな、雪音」

風鳴翼がにこやかに笑う。

「新車の慣らし運転をしていたら、偶然雪音を見かけたものでな」

ポンポンとシートを叩きながら翼。

正直、バイクの良し悪しなどクリスには分からない。

それでも丁度良い機会だと思って尋ねてみる気になったのは、先ほどの響の言動に由来する。

「先輩もクリスマス会に行くんだよな？」

「ああ、もちろん。参加するつもりだぞ」

「なんか、おっさんが賞品だすとかって話を聞いたんだけど、何の話か分かるか？」

「…は、ははは。何のことかさっぱり分からんなッ！」

上擦った声で断言する翼。

訝しげな眼差しで見ってしまうクリスを前に、防人は視線を遮るようヘルメットを着用。

「そ、それでは明日のパーティーで会おう！ では雪音！ 常在戦場ッ！」

「あ、おい！」

クリスの声も聞かず、ひらりとバイクに跨って一瞬でエンジンを始動。

見事なターンを披露して、たちまち車の流れに合流していった。また。

その姿を見送って、「怪しい。怪しさが爆発しすぎているッ！」とクリスが思ったのもむべなるかな。

少し逡巡したあと。

クリスの足はS・O・N・G・本部へと向いていた。

人の秘密を暴くような悪趣味はないが、自分ひとりだけハブられるのは我慢できない。

いや、我慢できなくもないけれど、居心地が悪いというか…。

そんな言い訳を内心で繰り返す彼女に、以前より寂しがり屋になったと指摘するのは野暮というものだろう。

果たして、S・O・N・G・本部で他の装者たちの姿を訪ね歩くリスだったが、図書室に辿りついて目を見開くことになる。

膨大な資料図書が収められたそこには、当然閲覧用のテーブルも存在する。

その広いテーブルいっぱいには何やら本を広げて悪戦苦闘しているのは、暁切歌、月読調の両名。

クリスにとって完全に意表を突かれた光景であり、多少なりとも感動してしまいう光景でもあった。

「…なんだおまえらッ、もう冬休みの宿題をしてんのかッ!？」

夏休みの宿題を終了日のギリギリまで片付けられず、クリスから手伝わってもらってどうにか仕上げた二人である。

その轍は踏まぬと、終業式を終えた翌日の今日、23日には既に宿題に着手しているのか…？

クリスの声に、切歌と調は揃って顔を上げた。

続いて、ワタワタと机に突っ伏すようにして広げたノートを隠してしまう。

「どとどとど、どうしたんデスカ、クリス先輩!？」

「いきなり声をかけられてびっくりしましたッ！」

作り笑いを浮かべる二人の態度は怪しいなどというレベルではない。

だいたい勉強しているなら隠す道理などないはず。

しかしクリスは無理な指摘はせず、敢えてテーブルに積まれた書籍へと目を転じた。

「…なんだ、これ？ 格言集と辞書？」

「しゅ、宿題の小論文を書いているんデス！」

上擦った声で言ってくる切歌。

「ま、まだ中途半端だから、見られると恥ずかしいから…ッ！」

同じく訴えてくる調に、クリスはなるほどと一応納得。

調の文章力は知らねど、切歌はかなり独特の言い回しを駆使するらしい。

そりゃあ未完成な文章を読まれりや恥ずかしいか。

「そっか、邪魔して悪かったな。二人ともがんばれよ」

言い置いてクリスは図書室を出て行こうとする。

「はいデス！ クリス先輩も明日は楽しみにしててくださいデス！」

「切ちゃんッ！」

口を滑らせたらしい切歌を調が諫める声。

…小論文とあたしが楽しみにすることに何の関連性があるんだ？

当然の疑問を催すその声を背に受けて、しかし今のクリスには振り返らない優しさが存在した。

あのバカ、なにやらおっさんが賞品を出すとかいつていたな？
だったら本人に直接問い詰めるまでだッ！

「あら？ そんなに肩を怒らせてどこに行くのかしら？」

その声に足を止めて振り向けば、マリア・カデンツァヴァ・イヴが立っている。

クリスは肩の力を抜いた。そんなに気を立てていたつもりはないのだが。

「ちよいとおっさんに用があつてなッ」

それでもぶっきらぼうな声が出てしまう。

「へえ、司令にイブのお誘いをかけるわけ？」

「ば、ばっかちげえよッ！ なんかおっさんが賞品を出すとかで色々画策しているって話を聞いたから…ッ！」

マリアの軽いジャブに慌てるクリス。

「ああ、そのこと？ 何かコンテストするみたいだわね」

「ッ!! それで!?! なんのコンテストなんだッ!?!」

「さあ、そこまでは…」

あっさり言つて首を捻るマリアに、クリスも驚きつつ一緒に首を捻つてしまう。

マリアまで詳細を知らないとなると、ハブられているのはあたしだけじゃないのか…？

「まあ、当日までのお楽しみにしていたらいいんじゃない？」

そう言ってくるマリアに、しかしクリスは首を振った。

「いや、せっかく本部に来たから、おっさんの顔を見てくるわ」

「そう？ 司令は忙しそうだったけれど…」

「一言挨拶するくらい時間は取れるだろ」

「…やっぱイブの夜のお誘いでしょ？」

「ちがうって言つてんだろーがッ！」

からかわれ、憤然とクリスは背を向ける。

顔を赤く染めたまま、ずんずんと歩を進める彼女は気づかない。

背後で、マリアが軽く「ちッ」と舌打ちし、素早くどこかに携帯端末で連絡していたことに。

発令所へ行くと、「司令は司令室へいるよ」と藤堯朔也に教えても
らった。

さっそく司令室へと赴き、なぜか少し緊張してドアホンを押すクリ
ス。

「あ、あの！ あたしだけど…！」

『おう、クリスくんか。どうした？ まあ入ってくれ』

ドアのロックが外された。

中へ入り、クリスは思いきり目を見開き、たちまち顔を真っ赤に染
める。

「お、おっさん、何やってんだよ!？」

彼女が真っ赤な顔を逸らしながら裏返った声を出してしまうのも
無理はない。

なぜなら室内では、弦十郎が上半身裸で鏡の前で絶賛ポーズ中。
中。

「いや、ちょうど一番格好良く見えるポーズを模索中だな」

「い、いいから早くシャツでも着てくれッ！」

ほとんど哀願するクリスに、弦十郎はいつもの赤シャツを羽織つ
た。

その隙間から覗く逞しい胸筋になお心臓を波打たせながらクリス
は問いかける。

「明日の、S・O・N・G・主催のクリスマスパーティーで、いったいな
んのコンテストをするつもりなんだ…？」

「ああ、余興としてボディビルのコンテストをするつもりだぞ。ちな
みに女性陣は水着コンテストを予定している」

「マジかよッ?」

事も無げに答える弦十郎を見て、そんなのおっさんがぶっちぎりで
一位じゃねーの? などとクリスは思う。

「で、でも! あのバカはあたしには内緒だつて…ッ!」

「ふむ? そもそもクリスくんは人前で水着姿を晒すことに抵抗はな

いのか？」

「そ、そりゃあ、あんまり嫌だけだよ…」

「だから、そういうことだ。最初から抵抗のある人間には声をかけていない。それだけのことさ」

「う…」

確かにクリスマス自身は誘われても出場は断つただろう。

でも、マリアも誘われてないのは…ああ、そうか。同性ながらあのプロモーションは反則だ。彼女が出れば、その時点で他の参加者の勝ち目はないか。

しかし、クリスマスパーティーで水着コンテストかよ？

そう疑問に思わなくもないが、過日のS・O・N・G・主催のパーティーでバニーガール姿を披露する羽目になった記憶が蘇る。

「そういうわけで、オレも明日へむけて準備に余念がないのだ」

またぞろシャツを脱ぎ捨て、ポージングを再開する弦十郎。

「わ、わかったわかったッ！ 悪い、おっさん、邪魔したなッ！」

急いでクリスマスは司令室を出る。

顔の血を下げつつ廊下を歩きながら、考えを巡らした。

全ては自分の取り越し苦労だったのだろうか？

何か釈然としない部分が残るけれど…まあ、明日になれば何もかもはつきりするか。

そしてクリスマスパーティー当日。

さっそく会場入りしようとするクリスマスは、小日向未来に呼び止められた。

「どうした？ 中に入らないのか？」

「えっと、響と一緒に入りたいから、待っててほしいって」

「で？ そのバカはどこいったんだ？」

「ちよつとお手洗いに…」

この時点でなんとなく嫌な予感がしたが、振り切つて会場入りするのもなんだ。

大人しく入口前の扉で佇むクリスマスに、響が息を咳き切らせてて駆け寄つてくる。

「お待たせ〜！ 準備できたよ〜ッ」

「おいッ、なんだ、その物言いは？」

「いいから入つて入つて」

未来が扉を開けている。

響に半ば背中を突き飛ばされるように、クリスマスは会場へ足を踏み入れていた。

会場内はなぜか真つ暗だった。

思わずたたらを踏むクリスマスに、スポットライトが。

「な、なんだッ!？」

眩しさに目を細めるクリスマスの視線の先には、巨大なスクリーンがある。

そこに映し出される文字は。

『雪音クリスマスさん。誕生日おめでとう！』

「な…ッ」

絶句するクリスマスを、万雷の拍手が襲う。

思わず周囲を見回せば、会場中の人間がみなこちらを見ていた。

もちろん切歌も調もいる。翼もマリアも笑顔で手を叩いている。

…え？ そんな、まさか。え…？

混乱するクリスマスのすぐ傍へ駆け寄つてきた響が、拍手に負けないよう耳元へ囁く。

「えへへ、クリスマスちゃんの誕生日はもうすぐの28日でしょ？ だか

らクリスマスだけじゃなく、クリスマスちゃんの誕生日も、職員のみんながお祝いしたいって…！」

不覚にもクリスマスは咄嗟に反応出来なかった。

あまりの衝撃と、それを押しつけて湧き上がってくる嬉しさに、おもわず涙が零れそうになる。

「でも安心して！ 28日の当日も、わたしたちでしつかりパーティーはするからねッ！」

そういつてくる響の首ねっこを掴まえてヘッドロック。

「このバカッ！ 驚かすんじゃないやねえよッ！」

憎まれ口を叩きながら、涙目の涙声。

「そういうわけだ、クリスくん」

拍手が終わったあと、弦十郎が目の前まで歩いて来た。

「なので、ボディビルコンテストも水着コンテストも嘘だ。方便ということで勘弁してくれ」

「お、おう」

横柄に応じながら、着てきた水着は無駄になったな、なんて考えるクリス。

「その代わりというわけではないが、秘密裏にコンテストを催していたのは本当だな」

「…へ？」

「そうだよッ！ ずばり、クリスちゃんの誕生パーティーのタイトルをいかにデコレーションするかのコンテストッ！」

響が割り込んでくるが、いまいち言っていることがよく分からない。い。

「要は、単なる誕生パーティー名では寂しいからな。なので、彩りを加えるためにも、装者たちに色々な文言を考えてもらうよう、オレ主催でコンテストを開いてみたのだが」

「うん、うん…？」

「いざ募集されたのを吟味してみたが、どれも甲乙つけがたい。なので、全て混ぜてみた」

笑顔を浮かべる弦十郎に促され、なにかイヤな予感をしつつもクリスもスクリーンを注目。

「では、S・O・N・G 主催クリスマスパーティー改めてッ！」

弦十郎の良く通る太い声に応じ、スクリーンに浮かんでいたメリークリスマス文字が切り替わる。

そこに表示される、装者たちがよってたかかって考えたクリスの誕生

日パーティー名とは。

『ナザレの大工のせがれが何するものぞ！』

我らがクリスちゃんのお誕生祭までのカウントダウン残り4。
先盛れ！ ピンシャン！ 今日から前々々々夜祭デース！』

「やめろおツ!!」

妄想ⅠF展開三部作 1. 雪音クリスはGT（ガールズトーク） したい

パヴァリア光明結社との決着も済み、世界は驚くほど平穏だった。予想された結社残党の蠢動も、S. O. N. G. 主導の作戦計画の前で隠密のうちに次々と潰されている。

シンフォギア装者が出勤するほどの案件もなく、風鳴翼とマリア・カデンツァヴナ・イヴのコンビはビルボードチャートを席卷。

他の装者たちも基本的に学生生活を満喫していた。

そんな中、長いツアーを終えた翼とマリアが帰国する。

実に久方ぶりに、装者全員で旧交を温めるために集められたのは――

「…なんであたしの家なんだ？」

雪音クリスはそうぼやく。

「だって、あたしたちの家は二人分荷物あつて狭いしー」

立花響が笑顔でのたもう。

「アタシたちの家も以下同文デース！」

「切ちゃん、なんでも物拾ってくるものね」

と、これは暁切歌と月読調。

「私もマリアも、今は基本ホテル暮らしだからな」

最後にシャワーを使ったので、濡れ髪を拭きながら翼が言う。

クリスの家集まる前に、全員本部で訓練を行い一汗をかいてきている。

「ほら、みんな、シチュー出来たよ」

小日向未来の声にキッチンへ向かえば、テーブルの上にはたくさん料理が並べられていた。

「ごちそうデース！」

さっそく摘み食いしようとする切歌をクリスはポカリと小突き、

「おまえもエルフナインを見習ってちったあ手伝えっての！」

「あ、ボクなら大丈夫です。みなさんお疲れでしょうし」

「うう、エルフナインちゃんは健気だねえ」

称賛しつつ、卓上のサンドイッチを豪快に三つも頬張る響。

そんな彼女にクリスは刹那でヘッドロックを決め、脳天を拳でぐりぐりと抉る。

「言動不一致って言葉知ってるか？ ああ？」

「痛い痛い！ やめてクリスちゃん、バカになっちゃうよ！」

「安心しろ、手遅れだ！」

ははは…と苦笑しながらその光景を見守るエルフナインに、他の装者たちも誰も止めようとはしない。

つまりは、これがもはや見慣れた風景であるということ。

「ほら、響もクリスもシチュー冷めちゃうよ？」

未来がそう告げると、二人とも身体を離し席に着くのも普段通りの流れである。

「それじゃ…乾杯かしら？」

とこれは調。

「そうだな。では、何に乾杯する？」

翼が応じる。

「そりゃあもちろん翼さんたちの凱旋にですよ」

響がグラスを掲げてみせた。

「ありがとう。そして久方ぶりにあつたみんなが元気だったことに」
そう言って微笑むと、マリアは一際大きくグラスを掲げて声を張った。

「乾杯！」

「乾杯！！」

唱和し、グラスの縁を突き合わせる音が鳴り響く。

あとは楽しい食事タイムだ。

「む、このビーフシチューは絶品だな」

「こつちのアボガドのクリームチーズ和えも美味しいわ」

唸る翼とマリアに、未来は笑ってみせる。

「美味しいでしょ？ シチューなんか、クリスが三日前から下準備したんですよ」

「そ、それは言うなっただだろッ!!」

「クリスちゃんも何だかんだ口では言っても楽しみにしてたんだね」

「もっぺん脳天抉られてえか、てめー」

殺気立つクリスに、翼の凜とした声が投げられた。

「雪音、過大な心遣い、心より感謝する」

「や、止めてくれよ、先輩。頭上げてくれて」

「私からも感謝を。貴女は切歌と調の面倒も良く見てくれてるようだし」

マリアからの柔らかな謝辞に、「いや、そんなことは…」とそっぽを向くクリスだったが語尾はゴニョゴニョとなってしまう聞き取れない。

「そうデスよ！ クリス先輩にはお世話なりっぱなしデース！」

「本当にそう。ばるんばる、いえ、クリス先輩にはいつも気を使ってもらっています」

「や、止めろ、そんな目でこつちを見てくんない！」

後輩二人の追撃に顔を真っ赤にしながら手を振り回すクリス。

さらに、

「基本的にクリスちゃんは御礼をいうのは苦手だけど、御礼を言われるのはもつと苦手だもんね」

「この大馬鹿！ おまえもかッ！」

後に小日向未来はこの時の様子をこう述懐する。

———なんか十字架を突きつけられた吸血鬼みたい。

もちろん本物の吸血鬼ではないクリスは、ガーリックブレッドにたっぷりとしチューを乗せて齧りついている。

その隣では響が泣きべそをかきながらしチューを啜り込んでいた。

「うう、頭が痛いよ」

彼女の後頭部にはたんこぶの段々畑が出来ていた。引き際の分からない者の末路である。

「御馳走様でした」

みんなで食器を洗い後片付けを終えれば、リビングへと場所を変えまったりタイム。

年少組の頃からココアが手渡され、室内に甘い匂いが漂う。

「それじゃ始めましょうか!」

コップ片手に未来の隣に座り込んだ響がいう。

「始めるって何を始めるんだよ?」

「女子が集まったら恋バナでしょ、恋バナ!」

「恋バナっておまえ…」

クリスが突っ込みかけたが、後輩の一人が先駆ける。

「ひよつとして響さんは彼氏が出来たんデスカ!?!」

「いやあ、絶賛彼氏いない歴〓年齢を更新中ですよ…」

てへへと響は頭を掻いて、

「そもそも、未来並みに魅力的な男子なんてそうそういないわけで」

クリスは呆れざるを得ない。

どこまでも小日向基準か。そりゃあ小日向ほど女子力の高い男子なんぞいるわきゃやねえだろうよ。

しかも恋バナと見せかけて惚気だし。いや、惚気も恋バナのうちか?
?

何かアホらしくなったクリスは、皮肉のつもりで言葉を投げる。

「もうおまえら結婚しちまえよ。日本でも地区によつては同性婚を認めてるみたいだし」

「実は、将来的にそれも視野に入れちゃったり入れなかったり…」

「…おいおい、冗談だよな?」

たははと笑う響の隣でその手をそつと握り顔を伏せる未来。

急に生々しく見えてきた二人から視線をそらし、クリスはわざと明るい声を出して対象を転じる。

「そ、そういうおまえらはどうなんだ? それだけ可愛いけりやモテるんじゃないのか?」

視線の先には、例によって切歌と調のコンビだ。

「アタシも調も先輩だつて女子高デスよ？ 出会いなんてどこにあるんデスか？」

至極正論が返ってくる。

「あ、でも私は街を歩いていて男の人から声をかけられたことがある」
控えめにVサインを出してくる調。

「おお？ なんて声をかけられたんだ？」

『「お嬢ちゃん、ちよつと遠い場所だけど、一緒に美味しいもの食べに
いかない？」つて車に乗せられそうになつたけど、直前で黒服の人た
ちに止められた。残念だった」

「……………」

それはナンパじゃなくて誘拐じゃねえ？

監視か護衛かは知らないがS・O・N・Gの黒服職員にクリスは
感謝の念を奉じる。

「おおーっ、調はいつの間にかアタシよりステップアップを!!」

「そう、私は切ちゃんより先にちよつとだけ大人の階段を上っている
の」

ふふん、と胸と鼻を反らす調に、切歌はあくまで無邪気だ。

「ああ、アタシもいつか運命の出会いを経て、燃えるような恋がしたい
デース！」

まるで少女漫画だな。クリスはそう微笑ましくながめていると、あ
らぬ方向から鋭い声上がる。

「その通りよ！ 思い切り、身を焦がすような恋をするべきだわ！
出来るうちに！ 可能ならうちにッ！」

一人カウンターでコップを傾けていたマリアが顔を上げていた。

唐突すぎる声に皆の視線が集まる中、マリア・カデンツァ・イ
ヴはポツリという。

「私たち、装者の寿命は短いのだから——」

沈黙がリビングを支配する。

装者である誰もが思い、しかし敢えて思考の俎上に上げない命題
だ。

誰もが固まった中、マリアの声は続いている。

「——正直、20歳も過ぎてあの格好で戦い続けるのは辛いッツ！！」

「……………」

ぷんと香ってくるアルコールの匂い。

「…ひよつとして、マリアさんお酒のんでる?」

響が質問。

「実は最近酒量が増えていてな…」

苦笑を浮かべて応じる翼。

「でも、いつそフィーネみたいな格好すれば全然いけるんじゃない?」
「いや、あれは全身タイツ見たいなもんだから、余計身体の線が出るだろ」

「そういう意味では、今の格好とあまり変わりないんじゃない?」

好き勝手に議論が盛り上がる中、

「あ、あの! そ、そのことなら、ボクがお力になれるかも知れませんっ!」

唐突にエルフナインが声を上げた。

「おい、そりやどいうこった?」

とろんとした眼差しで虚空を見つめるマリアに替わり、クリスが尋ねた。

「リンカーに恒常因子を合成してみるんです。アンチエイジングと似て非なるものですが、代謝をpushさせて成長を抑制することによって…」

言いさしたエルフナインの細い肩をがっちりと掴む者がいる。

「それはダメ。認められない」

「つ、月読さん？」

「あなたも私も可能性の塊。成長とは夢を見るための魔法の言葉」

「は、はい？」

「だから、その計画は却下。イイワネ？」

「は、はいっ、わかりました！」

睨みあう、というより一方的にエルフナインを睨みつけている調をよそに、翼は事態の收拾へと入った模様。

「ほら、マリア。後輩を前に見苦しいぞ」

「うろたえるな、未成年ッ！」

「いや、誰も狼狽えてはいないが…」

「愛だ恋だと囁ささる前に、翼、そういう貴女はどのようなよッ!?」

「私がどうしたというのだ？」

「緒川さんよ！ 緒川さんのことをどう思ってるのッ!？」

「いや、緒川さんはマネージャーで…」

「そういう意味じゃないッ！ 男性としてどう見ているのか訊いてやるッ！」

時ならぬ年長組のやり取りに、興味津々、息を潜めて見守る年少組。指摘されてみれば、緒川慎次の風鳴翼に対する献身ぶりは度を過ぎているものがある。

いくら部屋を片付けられないとはいえ己の下着さえ畳ませることを容認する女など、マネージャーとしての関係を逸脱しているのではないか。

また、アイドルとマネージャーが秘密の恋仲などというのも、週刊誌でよく見るゴシップだ。

「男性として、か。師として仰いだこともあるが…ふむ」

思いのほか真剣に考え込む翼がいる。

黙考することしばし、ぽんと手を叩いて、

「言われてみれば、理想の防人像というなら、緒川さんはかなり近いかも知れないかな」

「……………」

あんたの中では男性〓防人なんかい。

「何とも翼らしい返答に、クリスは彼女がアイドルらしい浮いた話が一つもないことに納得する。

そんな全く面白みのない返答にマリアは爆発。

「未通女^{おぼこ} 過ぎてヘソが茶を沸かすわッ！」

吠えるように意味不明な台詞を一喝し、次の瞬間テーブルに突っ伏してしまふ。

あとは「くぴー」という寝息が伏せられた顔から流れてくるだけ。

「色々マリアもストレスを抱え込んで疲れているようだ」

気遣い、背中に毛布をかけている翼だったが、おそらくストレスの要因は翼本人にも存在するだろう。

「…昔はマリアもモテていたんデスよ」

「そうそう。デビューしてしばらくは、山のようにお花を抱えて帰ってきて」

「お土産のケーキとかも美味しかったデスねー」

切歌、調が証言するとおり、歌姫としてデビューしたマリアは、一気呵成にスターダムへと上り詰めた。

比例するように人気も増大。言い寄ってくる男性も、それこそ枚挙に暇がないほど。

だが、世界放送で武装組織「フィーネ」を宣言してから全てが変わった。

国連のアンダーカバー職員だったとのストーリーが周知されたが、あの放送のインパクトは容易に払拭できるものではない。

歌姫として活動を再開した彼女に対し、かつて美辞麗句を並べたててきた男連中は素知らぬふりをし、新しく知り合った男性も全員および腰になっている。

「…私だって普通の出会いで普通に恋をしたいのに……ひつくー！」

寝言でダイレクトに本音を漏らすマリア。

かつてオートスコアラーの一人にアイドル大統領と揶揄されたことがあったが、今やそれは呪いに近い形になって彼女の中にぶつ刺さっている。

あまりにも切実な成人の主張は、リアルすぎて未成年者たちをドン

引き、もとい絶句させた。

もつともそんな空気を解さない未成年者も存在する。

「さて、次はいよいよ本命のクリスちゃんだよ」

「あん？ 何にいつてんだ、おまえ？」

「ずばり！ 師匠とはどこまでいつてんの？」

ぶーっ！ と冷めたココアを噴霧するクリス。

「な、なんで、あたしがおっさんとどうこうなるつてんだよ！」

「え？ だって二人でお食事いったでしょ？ 高級レストランのフル

コース！」

「なっ…!？」

どうしてそれを知っている!? あからさまに狼狽するクリスに響は携帯を向けて、

「ほら！ お召かしたクリスちゃんの写真！」

画面には、赤いワンピースを着た自分自身の姿が。

「あんまり可愛い格好しているから、こっそり尾行しちゃったよ」

「け、消せ！ 今すぐ消してくれッ!!」

「え？ あたしのは別にいいけど…みんな持つてるよ？」

見回せば、全員がこちらに携帯電話の画面を向けていた。

もれなく同じアングルの自分の姿が映っていることにクリスは絶望する。

よりによってあの馬鹿に見つかつてあとをつけられたあげく、証拠まで押さえられ共有されるとは末代までの不覚…ッ!!

思わず防人脳が発動し、切腹という単語すら頭に浮かびかけたが、寸前で踏みとどまる。

大丈夫、落ち着け。ここはクールに切り抜けろ。

「…おっさんには前から色々世話になつてたからな。その御礼で飯をご馳走しただけ。それだけだよ」

「あんなに可愛い格好して？」

「ちよつとしたレストランにはドレスコードが必須だろうが！」

「ふーん…？」

「…ともかく、この話題は終わり！ おしまいッ！」

「それじゃあクリスマスちゃんの好きな男の人のタイプって誰？」

「はあ!？」

「ちなみにあたしの好きなタイプはジャッキー・チェンです。はい、クリスマスちゃんの番!」

「あ、あたしはシユワルツネツガーとかスタローンとか? あとドウェイン・ジョンソンとかも好きだな」

「…クリスマスちゃん、もう告白しちゃった方がいいんじゃない?」

「なんでそうなるツ!? そ、それとクリスマスチャン・ペールだって好きだぞ!」

「それってガン!!カタの人じゃ…:あ (察し)」

「おい、おまえ、何を察した!? 言え!」

「言ったら怒るでしょー! もう怒ってるしー!!」

ぎやいぎやいと際限なくヒートアップしていくかと思われた二人の言いあい。

そんなクリスマスと響の後ろにスツと立つ人影が。

人影は、二人の肩にそつと手を置く。

不思議とその手から伝わる波動めいたものが心を落ち着かせてくれた。

大人しく振り返った二人の耳朵を、澄んだ声が優しく打つ。

「態度や行動では伝わらないことはあるわ。ちゃんと言葉にして伝えないと」

そうはつきりとマリアは告げると——糸の切れた操り人形のようにその場に倒れ込んだ。

あとには「ずおおお」と豪快なイビキが響き渡るのみ。

「…この人、本当に酔っぱらっているの?」

疑問が呈されたが、誰も答えるものはいない。

その後は特に話も盛り上がりならず、流れ解散となる。

各々がクリス宅を辞したが、泥酔したマリアだけが残された。

翌朝、二日酔いで目を覚ましたマリアだったが、昨晚の言動はまるで覚えていなかったらしい。

妄想 I F 展開三部作 2. 雪音クリスは告白したい

雪音クリスは跳ね起きた。

心臓がバクバクと音を立て、全身を震わせている。

無意識で額に手を当てていた。じつとりとした冷たい感触。

不快な夢を見たことは覚えているが、内容は思い出せない。

ただ、とてつもない焦燥感が、寝汗で濡れた胸の内に横たわっている。

ベッドから出たクリスは、キッチンへと赴き水を飲む。

音を立てて水をガブ飲みし、唇から忌々しい声が飛沫とともに吐き捨てられた。

「……こしばらくは見ていなかったのに、クソツ！」

さきほど見た悪夢は憶えのあるものだった。

まだ二課に参入した当初、幾度となく見ていた夢。

いちど二課付のカウンセラーに相談したこともある。

全く夢を見た記憶がないより、見たことを憶えていることの方が健全だと言っていた。

夢というのは脳内の記憶整理の結果であり、ストレスの発散に関わっているとも。

「健全どころかストレスも真つ赤だぜ……」

自虐的に呟き、クリスはコップを流し台に叩き付けように置く。

なぜ、あの悪夢を再度見るようになったか。

クリスには心当たりがあった。

過日、冗談とも本気ともつかぬマリア・カデンツァヴァナ・イヴの発した台詞が、心の奥深くで泡立っている。

『私たち、装者の寿命は短いのだから——』

戦うことは命がけであるということは理解している。

実際、どれほどの修羅場を潜りぬけてきただろう？

間一髪で死の顎をすり抜け、神がかった絶望を奇跡で粉碎してきた。

だが、そんな都合の良いことが延々と続くとは思っていない。

いずれは必ず命数を使い果たす日がくる。

シンフォギア装者として戦い続ける限りは。

——だからといって、あたしには他に何が出来る？

学校の授業中。

頬杖を突きながら窓の外を眺め、クリスは取り留めもない思考の波に身を委ねている。

「…雪音さん？　雪音さん!？」

「は、はいッ!？」

顔を上げると、教師がこちらを覗きこんでいる。

「どうしたんですか、雪音さん。さっきから何度も呼んでいるのに」

「…すみません、ついぼーっとしていました」

素直にクリスマスは頭を下げた。やれやれ、これじゃああの馬鹿を笑えないな。

教師は怒るでもなく、眉根を寄せてじつとこちらを見てくる。

「いつものあなたらしくないですね。どこか具合とか悪いんじゃないんですか?」

「いえ、そんなことは…」

「少し顔色も良くないようですし」

クリスは我知らず自分の頬に触っている。ここしばらく悪夢続きで良く眠れていないのは事実だ。

「無理せず、保健室で休んでらっしゃい」

教師に促され、クリスは素直に甘えることにした。

どうせ教室にいても、またぞろ思案を巡らせてしまうのがオチだ。

階段を降り、一階の保健室へと向かったクリスだったが、ドアの前を素通り。

そのまま玄関へと向かい、下足に履き替えて学校を出てしまう。

ていのよいサボリだが、普段の彼女は素行の良い優等生だ。バレたとしても大した問題にはなるまい。

幸い財布と携帯電話は制服のポケットの中にある。

教室に荷物と一緒に教科書とかも置きっぱなしなのは気にかかるが、予習復習をしなかったところでもいままさら乱高下する成績ではない。い。

となれば――。

クリスの足は自然とある場所へと向けられていた。

S・O・N・G・本部へと。

現在のS・O・N・G・本部は、次世代型潜水艦内に設置されている。

特にノイズや聖遺物絡みの事件が発生していない今、その巨大な機動拠点は日本国内の秘密ドックへと係留されていた。

関係者及び装者のみが、厳重なチェックを経て搭乗を許可されている。

結構な長距離間を昇降機にその身を委ね、クリスは潜水艦内へと入り込む。

次世代型を謳うだけあって、その巨体の内部はまるで窮屈さを感じさせない。

設備は各分野に渡って整えられ、娯楽施設まで存在するほどである。

有事の際に、箱舟として要人を乗せるためのものだ――。

S・O・N・G 職員の中にはまことしやかにそう話す者もいたが、クリスにとってそんなことはどうでも良い。

彼女が向かったのは、機密トレーニングエリアに設置された装者専用のシミュレーションルームである。

部屋のキャパシティや耐久性はもちろん、最新鋭の演算処理能力を持って様々なノイズの生態、攻撃パターンをシミュレーションし、質量を伴った仮想敵として戦闘することが出来る。

かつてナスターシャ教授が使用していた異端技術の流用によって、無数の三次元シチュエーションの選択や再現も可能だ。

クリスは部屋の入口にある端末のコンソールをタイピングし、環境を選択。

使用人数は一名。場所は市街地を指定。

敵性設定は、孤立した個人への波状攻撃。

室内へ身体を滑り込ませた彼女の耳に、カウントダウンのアナウンスが響く。

「Killter Ichaiival tron…」

聖詠。そしてイチイバルの装着。

赤い回転装束をまとい、彼女が降り立ったのは昼下がりのビルの谷間。

さつそくガトリング砲を展開するクリスの耳に、ノイズのざわめきが迫る。

「さあ、楽しいパーティを始めようぜー！」

しかし、言葉と裏腹に、クリスは全く楽しんでいない。

銃を撃ち放ち、ミサイルをぶつけ、ノイズを蹴散らす爽快感はある。だが、それだけだ。

胸の中の焦燥感は相も変わらず煮え滾っている。

「くそッ！ くそッ！ みんな吹き飛ばしまえッ！」

その言葉は、果たしてノイズだけに向けられたものだろうか。

気づいたとき、周囲のビルは残らず倒壊していた。

いや、ビルだけではなく、目立った建物も根こそぎされ、ほとんど更地に近い様相を呈している。

最後のノイズを吹き飛ばし、クリスは周囲を見回す。

ノイズは全て斃した。だが、地平まで広がる、この無残な街は何なんだ？

急激に込み上げてくる虚しさに、ペタンとクリスの膝が地面へと落ちる。

続けて、その頬を一粒の涙が伝う。

くそツ、くそツ。

やっぱりあたしにはこれしか出来ない。

あたしには何かを壊すことだけしか――。

「精がでるな、クリスくん」

「!？」

不意に背後から声をかけられる。

振り向けば風鳴弦十郎がすぐそばに立っていた。

「な、なんだよ、おっさん。いきなり声かけてくんよなッ」

頬を擦りながらクリスは立ち上がる。

斜めに睨み上げるが、その先の弦十郎の表情は厳しい。

「おまえが訓練しているのを見て、当初は声をかけず黙って行こうかと考えたが――」

弦十郎は上体を曲げて足もとの瓦礫を持ち上げると、

「あまりに痛々しく思えてな」

ゴリツと音がして、握られていた瓦礫は粉碎されていた。

クリスは思わず視線を逸らす。

「い、痛々しいってなんだよ、意味がわかんねえよ……!!」

「どうした？ 普段のおまえらしくもない」

「…へっ」

そんな学校の先生にも言われたよ、とクリスの唇が歪む。

「そんなことより、おっさん、いっちょ手合せしてくれよ」

クリスが弦十郎に向けたのは、あくまで不敵な表情。

しかし、表情とは裏腹に、彼女の内心は今にも泣き出しそうだった。どうしてこんなに感情が滅茶苦茶に揺れているのか、クリス自身にも分からない。心を制御することが出来ない。だからそのまま振る舞うしかなかった。

「本気の本気で相手してくれ。あたしも全力全開で行くから」
あくまで居丈高な態度と口調のまま、その実、クリスは哀願している。

「——頼むよ」

語尾が微かに震えた。

「……………いいだろう」

それを察したかどうかはわからねど、弦十郎は重々しく頷いた。

「本気には、本気で応えよう」

拳が握り固められ、腕の筋肉が隆起していく。

「感謝するぜ、おっさん」

今度は掛け値なしの礼を述べ、クリスは跳ぶ。

「……………やっぱおっさんは強えなあ……」

抉れた地面に仰向けに横たわり、クリスは空を見上げていた。

その姿を見下ろしながら弦十郎は苦笑している。

「どうだ、少しは落ち着いたか？」

はっ、やっぱり見透かされてるか。

さすがに屋内で広範囲殲滅攻撃などは使用できなかったが、対個人戦闘の範疇であればクリスは全身全霊を振り絞ったと言って良い。

その上で、弦十郎に完膚なきまで叩き潰されていた。

かつて装者が六人掛かりで全く歯が立たなかったことを思いだす。その記憶をリフレインすれば、クリス個人がどう頑張ったとて拮抗

すらできるはずもなく。

もちろんそのことは、誰よりも彼女自身が承知していた。

「…ああ、おかげで何かすつきりしたよ」

上体を起こし、隣に立つ弦十郎を見上げ、目を細める。

——初めて信用に足ると思いい、裏切らなかつた大人。

そして、強い。いつそ羨ましいほどに。

その佇まいに、クリスはデュランダルを幻視する。

膨大なエネルギーを秘め、決して折れることはない不朽不滅の剣。

自然と言葉が口を突く。

「…あたしも大人になれるかな？」

半ば無意識に発せられた言葉に含まれるは、羨望と願望。あるいはそれ以外の何か。

ゆえに迂闊に言葉を返せず口を噤む弦十郎だったが、クリスも強いて答えを求めていたわけではない。

片膝立ちで座りなおした彼女は、遠くへと視線を飛ばし、瓦礫の合間に沈んでいく夕日を眺めている。

状況設定は現実時間とリンクしているから、室外でも同様の光景が展開されているはずだ。

シミュレーションされたホログラム越しに現実世界を見つめ、クリスは尋ねた。

「なあ、おっさん。いま、こうやっている間にも、世界では戦争が起きて、人が次々と死んでいるんだよな？」

「そうだ」

「なんで戦争つてのは、なくならないんだろうな…？」

「それが人間の宿痼しゅくあだからだ」

弦十郎はそう断言する。

人類の相互理解を阻害するバラルの呪詛。かつてクリスはファイアーネと結託し、その呪詛を破壊して人類に恒久的な平和を齎そうと考えた。

クリスを気づかうまでもなく、バラルの呪詛を全ての元凶とする考えに弦十郎は組みしない。

唯一の絶対悪を肯定することは、人の積み上げてきた歴史と叡智を否定することだと考えている。

かつての支配者たる存在に全責任を求めたり、単純な二元論で判断してしまうほど、人類は浅墓ではないはずだ。

「宿痾つてのは…確か病気つてことだろう？」

「そうだ、病だ。故に治療できる。その治療法があることを教えてくれたのは、クリスくん、おまえだ。おまえたちシンフォギア装者だ」「あたしたちが…？」

「おまえたちは、手を携え、力を合わせることを教えてくれた。歌を通じて人類同士が繋がりあえることを証明してくれたじゃないか」

強い眼差しを受け、クリスは思わず顔を伏せる。頬が赤くなるのを自覚せざるを得ない。

「そっか…」

それきりしばらく沈黙して、頬の熱を覚ましたあと。

ようやく顔を上げると、クリスにはつきりと言った。

「なあ、おっさん。あたしは人類を守る。みんなの幸せを守るために戦うよ」

——そう、これでいい。

これがあたしの償いであり、許された生き方だ。

シンフォギア装者の寿命は短い？

そんなの知ったことか。

戦って、戦って、戦い抜いてやる。

命が撃ち碎かれるその日まで。

そう思った。

そう覚悟を決めて立ち上がろうとしたのに——なんで涙があふれて止まらない？

「…クリスくん？」

気遣う声が遠くに聞こえる。痛い、胸が張り裂けそうだ。そして痛みで脈打つ亀裂から滲み出してくるものがある。

止める。こんなの泣き言だ。言うべきじゃない。歯を食いしばれ。言うんじゃない…!!

強く強くそう願っているのに、口から溢れる言葉が押しとどめられない。

「なあ、おっさん、あたしは人類を守るよ…だから…」

震える声。懇願する声。

これは自分の声なのか？ それすら分からない。分からない、分からない、分からない。

分からないままに、魂は言葉を謡^{うた}う。

「だから…、誰かあたしを守ってくれ…ッ！」

その時、風鳴弦十郎は確かに耳にした。

血を吐くような表情で紡がれた少女の魂の絶唱を。

それは決して字面通りの意味が込められたものではない。直感でそう理解している。

二課からS・O・N・Gへ続き司令を担い、装者たちを見守ってきた。

全ての装者たちに公平無私で接してきたつもりだが、例外もある。それこそが雪音クリスだ。

現在S・O・N・Gが擁する装者の中で、もつとも足場が脆いのは彼女だと弦十郎は推察している。

例えば、立花響にとって小日向未来が守るべき存在であり日常の象徴だ。

風鳴翼は天羽奏の遺志を胸に秘め、歌姫という社会的側面を持つ。マリア・カデンツァヴナ・イヴも社会的立場は翼と同様のものを担うが、暁切歌、月読調との間に、家族にも似た、いやそれ以上の確かな絆がある。

対して、雪音クリスにはそれがない。

今でこそリディアン女学院の学友たちと学生生活の日常を大切に想い、満たされているやもしれない。

だがいくら温かく居心地の良い場所であるとはいえ、来年にはクリスは学院を卒業しなければならぬのだ。

他の装者と違い、普遍的な何かを、クリスだけが持ち合わせていない。

ひとたび学院を離れてしまえば、彼女の日常を担保するものが存在しなくなる。

それが弦十郎の抱いていた危惧であり、クリスの胸中の焦燥感の要因ともいえるだろう。

本日、その守るべき学校生活をサボり、自主的に本部へと足を向けたことも、いずれ失うであろう日常に慣れるためと解釈出来るのではないか。

最早いじらしいとさえ言えるクリスの様相。

そんな儂い少女を前に、弦十郎は片膝をついて目線の高さを合わせる。

いまにも凍てつきそうな瞳に涙を浮かべる彼女へ向けて、その言葉を口にするのに躊躇う理由など存在しない。

「分かった。おまえのことは、俺が命を賭けても守る」

クリスは欲している。

自分を、自分だけを支えてくれる、揺るぎない何かを。

もともと彼女の後見人を買って出ている弦十郎だ。

組織の司令という義務感からではない。乗りかかった舟、と表現しては情が無さすぎる。

少女の魂の声に応えたのは、大人の男としての矜持があるのみ。

「…本当か？」

「ああ」

返答は力強いうなずきと共に。

それは、およそクリスが望んだ最高の答えだった。

胸中の焦燥感が霧散していく。

魂に縛りついていた鎖が解けていく。

限りある日常。

命懸けの非日常。

守るべきもののない自分。

そんな自分に守られるだけの価値はあるのか？

抛るべきものを持たない不安が、心の均衡を崩していく。

また、間接的にとはいえ、ソロモンの杖という聖遺物を解放して幾多の人間の命を奪った過去が彼女の神経を責め苛んだ。

だが今は、支えると確約してくれた人がいる。

あとは目前のその男の胸に飛び込んで、咽び泣けばいい。

なのにクリスはそれが出来ないでいた。

なぜなら、頭の片隅から声が響いていたから。

『態度や行動では伝わらないことはあるわ。ちゃんと言葉にして伝えないと』

だからクリスは口にした。

緊張の取れた身体から解き放たれたのは、さきほどの魂の慟哭ではない。

むしろ柔らかかささえ伴う声は、それが彼女の本当の願望である証左だろう。或いは、心からの告白であったかも知れない。

「……………だったら、おっさんがあたしの家族になってくれないか…？」

弦十郎は目を見張る。

「…ダメか？」

先ほどとは一転して怯えと甘えの色が浮かぶ少女の瞳に、ふっと笑いかける。

静かに首を振り、弦十郎は自らのネクタイを外した。

クリスの左腕を取ると、丹念に手首にそれを結びつける

「これを決して切れることのない紐帯とする。おまえの十字架の半分は、俺が背負ってやる」

「え……？」

「おまえと、家族になろう」

「……………!!」

クリスは目を見張る。まだ状況を把握できないような顔つきで、幾度となく視線が左手首と弦十郎の顔を往復した。

弦十郎が再度力強くうなずいた直後、まるで土砂崩れのように顔が歪んで——しかし彼女は慌てて顔を伏せて表情を隠してしまう。

伏せた顔からくぐもった声。

「…不器用が過ぎるぜ、おっさん」

「生憎と、無骨一辺倒の生き方しかしてこなかったからな」

「もう返さねえぞ？」

「元よりそのつもりだ。むしろ返されても困る」

「…そっか」

そういつてクリスは顔を上げる。

そこにあるものは。

およそ彼女を知る者でも、誰も見たこともないような晴れやかな笑顔だった。

妄想 I F 展開三部作 3. 雪音クリスは結婚したい

S. O. N. G. 本部は発令所司令席にて。

風鳴弦十郎は頭を抱えていた。

「…どうしてこうなった」

背後にゴゴゴゴゴゴ…と効果音が固体化していそうなシチュエーションである。

そんな彼の目線の先。

卓上には一枚の紙が載せられていた。

『婚姻届』

しかも妻になる人の欄には、既に雪音クリスと記入済み。

「いい加減、観念なさつたらどうなんですか?」

友里あおいの声は呆れ声に近い。

脂汗を流しながら硬直する司令官の姿は珍しい見世物だったか、朝からずつとではさすがに辟易してくる。

「そうはいうが…。俺が家族になろうと言ったのはこういう意味では…」

これまた非常に珍しく言い訳を口にする弦十郎。

「まさか養子縁組で済ませるつもりだったんですか?」

「む…」

まさにその通りなだけに言葉に詰まる弦十郎に、

「それじゃあこの紙を持ってきたクリスちゃんの気持ちはどうなるんですか」

友里は容赦がない。

「シミュレーションルームでのやりとりは、お互いにプロポーズしてるとしか思えませんでしたけどね」

装者専用の設備は、基本的に全てモニターされている。

当然シミュレーションルームの映像も会話も録音済みで、確認したエルフナインが真っ赤になってのぼせてしまったことは、友里の発言を十二分に補強しているだろう。

「そうはいうが、あいつはまだ17で…」

「ええ、もう17歳の立派な大人ですよ」

現行の民法では、女性は16歳で結婚が可能だ。

正しく法律を理解し、権利を行使出来る人間を、大人と言わずなんといおうか。

「しかしだな、年齢差も考えてみる」

それでもどうにか食い下がろうとする弦十郎だったが、

「ええ、司令とクリスちゃんの年齢が逆な場合より、よほどあり得るケースですね」

友里に一言で切つて捨てられる。

「ぐむむ…」

呻く弦十郎に、友里は助け舟を出すことにする。

ただし、同情や優柔な気持ちは微塵もない。これ以上追い詰めても罅が明かないと判断したまでのこと。

「形だけでも結婚し、夫婦生活ではなく普通の家族として暮らせばいいんじゃないですか？」

突き詰めれば、雪音クリスを保護対象と見做し、一人の女として見られないのが根本的な原因だろう。

友里は正確にそう推察している。

「…そういうもの、なのか？」

弦十郎の戸惑う反応に、友里はここぞとばかりに別角度から外堀を埋めに入る。

「現実問題にも、組織のトップともなる司令が妻帯してくれないと、部下も遠慮してしまいますよ」

元々日本人は滅私奉公の意識が高い。国防に携わるものなら尚更だ。

やや前時代的だが、家庭を持たず防人としての勤めを邁進するといふ氣質が二課には残っていた。

その指摘に弦十郎は考え込む。

確かに自分より若い緒川や藤堯も未婚だ。

それが上司に遠慮するというのなら、早急に是正しなければならぬ問題だろう。

その上で目前の部下に尋ねてしまったのは、普段の彼らしかぬほど色々とネジが緩んでしまっていたからに違いない。

「…友里もそうなのか？」

ピシッと室内が凍てつく音が響く。

「ええ、ですが毎月釣書が山のように届いておりますわよ？」

にこやかに断言する割には口元はひくついている。見開かれた目は笑っていない。

実家経由で釣書が届き、見合いのセッティングをされたことは一度や二度ではない。

が、そのたびにノイズの襲来や何やらでことごとくポシャっていた。

加えて、国連直轄組織という看板を背負っている以上、相手の身辺調査は入念に行われる。

問題のある候補は跳ねられるが、残った手合いも一筋縄ではいかなる者も多い。

エリートコースにはあるが性格に短所が見られる人物や、それこそ弦十郎とクリスほどの年齢差がある相手が出てくることも珍しくなかった。

玉の輿や出世を狙うならそれもいいだろう。

だが友里は、この仕事に一命を賭けているという誇りや責任感がある。そしてなにより

——自由な恋愛がしたかった。

運命の出会いを果たし、度重なる困難を乗り越え、激しく心を通い合わせて結ばれる。

まるでハーレークインロマンスのようだが、それが友里あおいの恋愛観。

ゆえに、合コンなどに頻繁に顔を出しているのだが、現実は無味。基本的に秘密組織の人間は、素敵な運命の出会いよりハニートラップや情報漏えいの心配をしようし、巨大潜水艦に職場が移動になつてからは合コンの回数そのものの減少にさらに拍車がかかっている。

…わかつているわよ。でも夢を見るくらいいいでしょう？

そんな彼女にとって、実のところ弦十郎とクリスの関係は羨ましくて仕方ない。

なのに当の男が煮え切らない。

友里がクリスの肩を持つ原因はこれだった。

「とにかく！ そうと決まれば、さっさと新しい住居を探しましょう！ 今の官舎は独身用ですからね！」

「…そうだな、結婚しても、今まで通りに普通に接すればいいのか」
友里の迫力に、ほぼ思考停止で押し切られている弦十郎だが、本人がそのことに気づいていない。

「それじゃあ次は結婚式の手続きですね！ 他にも式場の予約や時期も考えて、招待客の選別など、やることは山ほどありますよ！」

「お、おう…」

「形式にもよりますが、ドレスとかお色直しもどうしますか？ それに新婚旅行はどこかを考えてます？」

怒涛のように捲し立ててくる友里に、弦十郎はタジタジとなる。

「その他もろもろ、クリスちゃんと一緒に考えていきましょね！」

結婚式に対してするべきことを見事に羅列しきって友里は満足げに微笑む。

その手際の良さに、ふと弦十郎は疑問を抱く。

しかし口には出さなかった。

それは友里の代償行為じゃないのか？ と指摘するほど、彼は命知らずではない。

「いやあ、クリスちゃんと師匠が結婚することになるとはねえ〜」

立花響が指に挟んだ招待状をヒラヒラさせながら感慨深げに言う。

「クリス先輩と司令がそんな関係だなんて全然知らなかったデース

…」

こちらは暁切歌。彼女も含め、マリア・カデンツァヴナ・イヴと月読調もルナアタック前後のクリスの動向の詳細は知らない。かつて彼女が二課に敵対してた程度の情報が精々だ。

「愛が早すぎる…」

そう呟く調の頬は微かに赤い。

マリアに至っては、

「先を越された…ッ」

と、どんよりとした表情で、調と顔色は対照的になっている。

「叔父は防人の極点にあるような人だからな。雪音の男を見る目は確かかということだろう」

うんうんと一人満足げに頷いて見せる風鳴翼。

それを見て、あはは…と控えめに笑うのが響の隣にいる小日向未来だ。

現在彼女ら六人は極秘扱いの専用エレベーターに乗っていた。

全員がパーソナルカラーのカクテルドレスを身にまとい、非常に煌びやかである。

エレベーターのドアが開くと、エルフナインが待ち構えていた。

「みなさん、お疲れ様です」

そういう彼女もクリーム色のドレスが良く似合っている。

エルフナインに先導されて一行が進むのはS・O・N・G本部でもある巨大潜水艦だ。

本日の結婚式の参列者は、装者を始めとした関係者へと限定されている。

保安警備の観点と、いつ緊急出動がかかるやも知れぬ状況から、止むを得ない選定だった。

参列者の待合室に通されると、テーブル一面のウエルカムドリンクやサンドイッチといった軽食に響が歓声を上げる。

「さっすがクリスマスちゃん、気前がいいねえ〜♪」

「わたしには、『それでも食べて大人しくしてる』って意味に思えるんだけど…」

さつそくパクつく響に、ここでお腹いっぱいになつちや披露宴で食べられなくなるよ、と諫める未来。

「この気配りや豆々しきからして、真実、雪音は良い妻になるだろうな」

梅こぶ茶を啜りながら翼がしみじみと言う。

「そうだね、おっぱいも大きいから、子供もたくさん産めそうだし！」

「響、牛さんじゃないんだから、胸の大きさは関係ないよ」

そういう未来の背後で、高速でコクコクと頷く調。

「それにしても、結婚式なんて初めてデース！」

実はこの面々の中で教会式の結婚式、つまりはウエディングチャペルに参列した経験を持つのは、響と未来だけになる。

二人とも幼少のみぎり、親戚の結婚式で花束を贈呈したり、ウエディングドレスの裾をもったりした記憶があった。

翼も出席した経験があったが、風鳴一族は基本的に古式ゆかしい神前式一択である。

マリアたち三人、レセプターチルドレンは冠婚式には無縁。精々メディアからの知識がある程度だ。

「チャペルでね、新郎はタキシードに新婦はウエディングドレスを着て、永遠の愛を誓うんです」

そんな三人に懇切丁寧に説明をしていく未来。

「そして最後には、花嫁からブーケトスというのがあって…」

「なにそれ？ え？ 幸せのお裾分け？ 受け取った女性は…次に結婚できるツ!？」

目をランランとさせ、異様に話に食いついてくるマリアがいる。

「それじゃ、そろそろ行こうよ、みんな」

一人さつさと食欲を満足させたらしく、手をパツパと振り払いながら響が言う。

「え？ 行ってくつてどこへ？」

「そりやもちろんクリスマスちゃんのとこだよ！」

響はエルフナインに頼みこみ、花嫁の控室まで案内してもらった。

なんだかんだ言っても式の開始までまだ一時間強もあつたこともあり、結局全員がついてきている。

さつそくドアの前でほくそ笑む響。

「へっへっへ、ウエディングドレスを着ると動きづらくなるんでしょ？ だからこの際、普段のお返しに弄り返してやるんだー♪」

両手をワキワキさせる響に、

「やめておいたほうが…」

と未来はいうものの、止めるつもりはないらしい。

「まあ、それはさておき、みんなは気にならない？ クリスちゃんがどんなウエディングドレスを着ているか」

響は一同を振り返って言う。

全員の眼が輝いていた。

式が開始されれば嫌でも目にするわけだが、そこはそれ皆が乙女である。

花嫁姿に憧れない女性はいないし、友人の晴れ姿を一刻も早く拝みたいのは人情というものだ。

マリアなどは「そうね、後学のためにも拝見したいわね」と冗談めかせて口にしたものの、本気の純度が高すぎる。

全くの余談であるが、教会で結婚式を挙げるとクリスが伝えたとき、響は「クリスちゃんだから？」と誰もが思いつきそうなダジャレを口にして脳天チョップを喰らっていた。

そんな脳天を叩き割られかけた招待者は、さつそく自分の予想を披露する。

「あたしはやっぱり純白のドレスだと思うなー」

「ううん、クリスのことだから、真っ赤なドレスもありかも」

「いや、案外白無垢かも知れんぞ」

どうやらウエディングチャペルを理解していないらしいSAKI MORIの発言を無意識で無視し、響は勢いよくドアを開け放つ。

「ク・リ・ス・ちゃ〜ん!」

直後、響の眼が点になる。

半瞬遅れて入ってきた他の仲間たちも目を丸くしている。

無理もない。

室内の光景は、彼女たちの予想を超えて遙か斜め上を行っていたのだから。

なんとクリスはイチイバルを装着し、椅子に片膝胡坐をかいて豪快にカップ麺を食べているところ。

「なんだよ、ノックくらいしろよな」

ずびーと麺を啜りあげ、クリスは闖入者へ向けて割り箸を突きつける。

「い、いや、クリスちゃんこそなんでシンフォギア纏ってるの？ ウエディングドレスは着てないの？ 花嫁だよ、もうすぐ式始まつちゃうよ!!」

「ああ、それな。朝から着るのに偉い時間かかってさ。おまけに動きづらいったらありやしない。んでも腹減ったから今ラーメン喰ってるよ」

どうにも話が噛みあっていないように思える。

そんな中、風鳴翼が唸るように言った。

「なるほど、シンフォギアの格納能力がこんな風に使えるとは…」

その言葉に、ほとんどの装者がピンと来た。

通常、シンフォギアを装着する際、着用していた衣服はコンバーターへと格納される。

シンフォギアを解除すると同時に再構成される仕様になっているが、よもやウエディングドレスが窮屈だからと使おうと考える者がいるだろうか？

「だめだよ、クリスちゃん、早く着換ええないと〜」

ただ一人ピンと来ずまわりついてくる装者の顔を「うっせえ、大

丈夫だ」と押しつけて、クリスは招待客たちをぐるりと見回す。

「それよかどうしたんだよみんな、雁首揃えて」

「いや、雪音の晴れ姿を早く観たいと立花がな…」

「おっと、そいつは残念だったな。あとのお楽しみってことでカンベンしてくれ」

椅子の上でうししと笑って見せるクリス。

「ね、ね。クリスちゃんは師匠のどこに惚れたの？」

「どうやら意地でも弄りたいらしい響が食い下がってくる。」

「そんなもん…!」

いつもの調子で激しそうなクリスだったが、ふっと落ち着いた表情に戻る。

「おまけにやれやれと言う風に手首をヒラヒラさせて、」

「そういうのは、お互い同士が弁えてりやいいのさ。わざわざ他人に話さなくてもいいんだ」

「うわ、なにその大人の対応」

「こう見えても人妻だからな、あたしは」

フンと余裕を持って鼻で笑って見せるクリス。

「でもでもデース。今後、風鳴先輩が二人になるということデースかー？」

単純に現行で呼び分けは出来ているが、切歌が素朴な疑問を呈してくる。

「あ、それに関しては、あたしは旧姓の通称利用ってヤツで、雪音クリスのままでいいよ」

「それは助かる。自分と同姓で呼ぶのは些か…と思っていたところだ」

「これからはよろしくお願いしますよ、センパイもとい姪っ子ちゃん？」

「こちらこそよろしく頼みます、叔母上」

「すみません調子乗りました」

S・O・N・G 本部である次世代型潜水艦内には、チャペルも存在する。

が、クリスが希望した式場は屋内ではなく屋外だったので、急遽潜水艦の甲板に臨時のチャペルが設置されるに至る。

というわけで、現在S・O・N・G 本部は日本領海内に極秘裏に浮上していた。

出港の建前は、さすがに慣熟訓練ということになっていたが。

祭壇と椅子とバージロードが引かれているだけというとてもシンプルな造りだったが、四方を全て青い波濤に囲まれ、どこまでも高く雲一つない蒼穹が最高のシチュエーションを演出していた。

緯度も高いので日差しもきつくなく、海風も涼しい。

「うわー、気持ちいいね〜」

はしゃぐ響は未来に引つ張られて無理やり着席。

一番先頭の席に既に風鳴八紘が着席していたが、他は特に席順は定まっていなかった。

「それでは新郎の入場です」

柔らかい声は緒川慎次のもの。

今日の司会進行は緒川さんか、と翼は眩く。

続いて、エレベーターシャフトがせり上がり風鳴弦十郎が姿を現す。

今日の彼はいつもの赤いシャツに純白のタキシード、白のネクタイも締めていた。

普段の彼ならぬギクシヤクとした歩き方で、起立する参列者の間を抜けて祭壇の前に立つ。

「続きまして、新婦の入場です」

皆が固唾を呑んで注視する中、今度はエレベーターシャフトから雪音クリスが姿を見せた。

「うわあ、クリスちゃん綺麗…!!」

ダイレクトに感嘆の声を上げたのは響だけだったが、他の参列者の反応も似たりよったりだった。

純白のウエディングドレスが海風に揺れている。

プリンセスラインと呼ばれるシルエツトで、上半身は肩を隠しつつタイトだが、腹部からは幾つものギャザーやフレアが広がりとにかく華やかだ。

所々にあしらわれた深紅のバラを模したアツプリケも、彼女の魅力をより高めている。

白い左のグローブに何やらピンク色のものが巻きつけられているのが目を引くが、純白のヴェール越しに軽く化粧をした彼女の前には瑕瑾にもならない。

濃いめの赤いルージュを引いて、軽く目を伏せてしやなりしやなりとバージンロードを歩いてくる姿は、羨ましいほど大人びて見える。

そんな彼女は、緒川慎次にエスコートされて祭壇の前に。

ふむ、エスコート人は緒川さんか。…ん？

祭壇前で、新郎は新婦へと託された。

丸眼鏡をかけ、牧師の恰好をした緒川慎次が宣言するように言った。

「それでは讚美歌の斉唱を」

元々装者の歌唱力はずば抜けている。

更に世紀の歌姫と目される風鳴翼とマリア・カデンツァヴナ・イヴを加えた豪勢すぎる讚美歌が、海原に響き渡った。

牧師が聖書の一節を読み上げ祈祷すると、いよいよ新郎新婦への問いかけである。

「新郎、風鳴弦十郎、あなたはここにいるクリスを、病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も、妻として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」

「…はい、誓います」

心なしか苦しそうな表情で誓う弦十郎。

「新婦、クリス、あなたはここにいる弦十郎を、病める時も、健やかな

る時も、富める時も、貧しき時も、夫として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」

「誓います」

厳かに、お淑やかに、クリスマス。

「それでは指輪の交換を」

卓上に載せられた、あまりにサイズの違いすぎる指輪が交換された。

「次に、誓いのキスを」

とうとうある意味結婚式最大のクライマックスがやってくる。

「ふわああ…」

と切歌、調、エルフナインといった年少組は頬を真っ赤に染め、翼やマリアも息を飲む。

響は未来の手をぎゅっと握りしめ、友里はもうハンカチで目尻の涙を拭っていた。

皆が見守る中、音を立てるようにして弦十郎の長身が折り曲げられる。

もともとクリスマスの身長が低いこともあって、いつそしやがんだ方がいいほどに腰を折り曲げながら、花嫁のヴェールを捲り上げた。

「いよいよ顔を近づけて——弦十郎はこっそりとクリスマスに囁いている。」

「もうこれでいいだろう…!?!」

本来は、学校のクラスメートも招待して盛大にしたい、というのがクリスマスの希望だった。

しかし、警備上の問題や、様々な手続き上の問題が立ちはだかっている。

時間をかければそれらもクリアできなくもなかったが、結局クリスマスは装者と身内だけの式で妥協した。

それが意味するところは、この結婚式自体、自分に家族が出来たと他の装者たちに周知するセレモニーのつもりなのではないか。

であれば、家族となった以上、特に夫婦であるという証明に拘らなくてもいいのでは？

この期に及んで往生際が悪い弦十郎に、クリスは軽く目を見張ったが、それだけだ。

「…つたく、大概鈍いよなあ」

むしろ化粧を施した端正な顔立ちでニンマリと笑う。

それから赤い唇を少しだけ拗ねたようにすぼめ、雪音クリスは風鳴弦十郎に言った。

「家族になりたいって、あたしが本当にそういう意味だけで言ったと思ってるのか？」

「…なんだと？」

次の瞬間、弦十郎のネクタイを引っ張ったクリスは、顔を近づけて唇を重ねている。

歓声上がる。続けて拍手。

「これで、新郎弦十郎と新婦クリスの婚姻が認められました。おめでとうございます」

緒川牧師の宣言に、またぞろ豪華すぎる讚美歌が響き渡った。

あとは新郎新婦がバージンロードを歩いての退場となる。

常ならぬほど顔を赤くし足もとも覚束ない弦十郎の腕を、しっかりとクリスが支えていた。

そんな二人に盛大にフラワーシャワーをかけながら、周囲が引くほどガチ泣きしている響がいる。

「うゝえゝえゝん、クゝリゝスゝちゃんが取られ
ちゝや っ たゝよゝうゝ…!!」

「もともと響のものでもないでしょう？ ほら鼻水かんで」

そういう未来も目が潤んでいたが、これは友人の幸せな門出に感動してのことだ。

他の装者の様子も未来に準じており、口々に「おめでとう」との賛辞を繰り返している。

「それじゃあ記念撮影しますよ」

カメラマンが緒川であることに、最早誰も突っ込もうとはしない。

煌びやかなドレスの装者の面々が集う中心で、新婦はとても晴れやかな笑顔を浮かべていた。新郎に関しては敢えて記さない。

そしてついに最後のブーケトスである。

装者に森里も加えた面子を背に、クリスはこっそりと胸元からギアペンダント引っ張り出す。

「おい、クリスくん…」

気づいた弦十郎が声をかけるが、構わずクリスはブーケを後ろに放っている。

続けて、聖詠。

宙を飛び、今まさに皆の手が届く寸前の空中で、ブーケはイチイバルの弾丸に射抜かれた。

「わあ…!!」

飛び散った花卉が、あたりに雪のように降り注ぐ。

風に、海原へと飛び散っていく。

その一つ一つが世界を渡り、平和を伝える歌になればいいのに、とクリスは思った。

1. 結婚式後

ブーケのことで、友里とマリアに無茶苦茶怒られた。
なぜか弦十郎も一緒に正座させられた。

2. 呼称問題

「それでさ、おっさん」

「……………」

「どした？」

「…いや、結婚して夫婦になった手前、そのおっさんてのもな」
「だったら…ダーリン？」

「ハードル上げ過ぎだろう、それは」

「それじゃあ……………弦十郎、さん？」

「……………予想以上にこそばゆいな」

「くくツツ!! 言わせたのはそっちだろツ!!」

3. 呼称問題 解決編

「ノイズの反応を探知した！ 装者は全員急行してくれ！ …頼んだぞ、クリス!!」

「わかった任せとけ旦那ア!!」

響「なんだろう、すごく納得できるけど、同じくらいすごくモヤモヤする……」